

「出 会 い」

北原白秋・山田耕筰 生誕百年によせて

—^{ポストマニ}譚詩歌曲 芥子粒夫人—

土肥 みゆき



山田耕筰百言集より

- *音楽のうちで、吾々の日常生活に最も交渉の深いものは、歌である。
- *詩は言葉の音楽をこそ含め、音楽そのものではなく、音楽は音の詩こそは表現しえても、言葉の詩そのものでない。
- *歌謡の作曲に際して、単なる旋律以外に伴奏を必要とするのは、詩句以外の詩想と楽想との融合した芸術境を彷彿せしめんが為である。
- *西洋音楽の美しくしさは整へられた街の美に等しいものではないでせうか。日本音楽の美は自然の風景に等しいものではないでせうか。前者は角度的であり、後者は線的であります。前者はその間隔を画一的に齊へた階段の如きものであり、後者は林間を流れる坂路の如きものと云へましょう。
- *おそらく Nationality といふものは、その人が意識的に現はそうとして完全にあらはし得るものではありませんまい。むしろ Nationality は、意識を超越したもので、かりに現すまいとしたところで、結局何らかの形に於て現れて来るものなのでせう。他国の Influence といふものは、決してさう急にその国の国民性を、変質させるものではないと私は信じている。
- *国々によってその国語の異なる如く、国境を隔てた国と国とは各々違った国の心を持ってゐる。仮令世界の国語がエスペラントに統一せられたとしても、その新語の用法と、それを用ひて表現する心とは到底一つではあり得ないであらう。音楽は世界語であるといふものがある。楽理に統一せられた音楽は、実際、世界の何れの国民にも通ずる言葉であるかも知れない。が、その言葉を通して表現しようとする心は、必ずしも万人に同じ響きを与えるものでない。我々は洋楽の心を解し、自分の心をそれに触れしめることは出来るけれども、我々の国民性があり、我々に我々の個性がある限り、洋楽の心はそのまゝに自分の心であると言ひきることは出来ないであらう。恰度、文学者が在来の言葉を用ひて新しい熟語を造ったりするやうに、最も自由な感情の表象的表現である音楽が、在来の洋楽の形式的踏襲の域から一步を踏み出して、我々自身の心を物語る時が来なければ、我々の真実の心の要求は充されることがないであらう。私は目覚めた日本が、洋楽の外形に煩はされることなしに、日本自身の心を静かに語り出る日の一日も早く来らんことを祈り、且つ待ち望んでゐる。

〔注〕「百言集」

大正15年から昭和初期にかけて発表された「童謡百曲集」につけて書かれたもので、歌・詩・芸術・舞踊・教育・西洋音楽と日本の音楽・ハーモニー・リズム・作曲家スクリアピン等、多岐に渡って氏の理想、意見が書かれています。

明治32年6月、小学唱歌集用オルガン・ピアノ楽譜序の中に「第一、唱歌伴奏の用に供し」という言葉があります。唱歌が発展し芸術歌曲になっても現在この言葉は以前のまま使われています。「伴奏」という日本語のイメージは歌曲演奏に大切なピアノパートの重要性を誤解し、軽視する原因をつくってしまいました。

練習用伴奏者でなく演奏者としての伴奏者は、ヨーロッパでは非常に高い評価の仕事として認められています。それは少くとも5ヶ国以上の語学力が必要である事は元より、音楽に対する深い教養と高い技術が要求されるからです。神戸女学院大学音楽学部で「伴奏法―(日本歌曲伴奏法)」の講座を担当するに当たり、ピアニストの立場から詩人と作曲家及びピアノ伴奏技術に対する理解の必要性を感じ研究と考察をしました。

今年は日本の洋楽界の黎明期を拓き、明治・大正・昭和と日本洋楽をリードしつづけた偉大な音楽家山田耕柞の生誕百年を迎えました。洋楽を基礎として創作された日本の芸術歌曲は、白秋と耕柞の「出会い」によって生まれることとなりました。

白秋の「芥子粒夫人(ポストマニ)」というおとぎ話を基にした譚詩歌曲を通して、童謡、童話に託した「白秋の美しい童心」と「耕柞の青春の夢」にスポットをあててみたいと思います。

1985年1月25日は北原白秋生誕百年(1885年 明治18年生)。

1986年6月19日は山田耕柞生誕百年(1886年 明治19年生)。

去年は、近代日本の詩聖「北原白秋展」が各地で開催され、過去40年に及ぶ文筆の精華が百冊を越える単行本として世に贈られてきたわけですが、今回再び、長男北原隆太郎氏の長年の尽力により、岩波書店より第一期二十四巻が刊行され、白秋の研究家から熱い期待が寄せられています。

詩・短歌・童謡・民謡・エッセー・批評・編集・装幀、など、その幅広い遺産は豊かな愛情と叡知を秘めて不滅の光をたたえ人々の心に深く親しまれています。

福岡から西鉄大牟田線に乗り、「いぐさ」畑の中を久留米を過ぎ柳川駅に降りたちますと、白秋作詩、耕柞作曲の「からたちの花」「この道」「砂山」等、なつかしい歌が聞こえてきます。終日何曲かを繰り返し放送しているようで、珍しいこの「駅の音楽」は、静かな水郷の街の空に拡がり、不思議に心のときめきを覚えさせます。白秋生家までの川下りコースは、四季の花々と柳に囲まれ、橋の一つ一つに長閑な落ち着きを残し封建時代の文化の名残りを告げて、京都とは一味違う親しみを投げかけてくれます。

1912年(明治末年)北原一家の上京以後幾度も転売された白秋の生家は、1969年(昭和44年11月)その少年時代の姿を復元して柳川に豊かな潤いを与え続け、風格のある木造の家に並べられた硝子箱には、白秋のひたむきな人生が生み出した詩集・歌集が、心をこめたこの詩人の装幀で、古風な家とは反対に「ハイカラ」というのでしょうか、彼の現代的センスを匂わせて大

切に保管され、訪れる人々の心を包んでくれます。

白秋が思慕し続けたこの水郷柳川の少年時代、19歳で上京、「邪宗門」「思い出」で名実ともに詩壇の第一人者となった青春時代、松下俊子・江口章子との純粋な愛・貧窮極まる結婚生活と離別により享楽的詩風と訣別し、魂の慟哭を歌う詩人への転換を果した遍歴時代を経て、壮年時代が始まります。1921年（大正10年）佐藤菊子と結婚、1922年（大正11年）白秋37歳にして長男隆太郎の誕生、1925年（大正14年）長女簗子誕生の喜びに接し、家庭的な安息をも得られた前後から、童謡集の一群が生まれてきます。直接には大正7年7月、鈴木三重吉創刊の児童芸術雑誌「赤い鳥」の童謡の部担当より出発しているわけですが――。1925年（大正15年）9月、「芥子粒夫人」というお伽話は「象の子」童謡集⁽¹⁾にのって登場しますが、原稿はもっと早く耕柞のもとに送られていたようで、彼は⁽²⁾大正12年より13年にかけてこの曲を作曲しています。

この難曲はともかく、多くの白秋の詩が愛された原因には、作曲家達が童謡だけでも600曲の作品を残し、その上、我等のテナー藤原義江氏が「声楽家が日本歌曲を演奏するのは『恥』」と思われた大正時代に、民衆より熱望されて全国に亘り日本歌曲の紹介に務めた事にあると思います。

白秋と耕柞の「出会い」は、1910年（大正10年）頃で、この二人の天才達の円熟期にあたり、翌年9月には「詩と音楽」⁽³⁾がアルス出版社より発刊され、文学と音楽の融合を実現すると共にこの「名コンビ」が生まれる事になりました。

貧に耐え、変転極まりない人生遍歴と、「言葉」と「音楽」への凄絶な闘い、先導者としての受難に満ちながら、激しい情熱を燃やし続けた二人が、短期間にもかかわらず、一日一日と親密度を深めたのは、耕柞の並はずれた「言葉」に対する知識と才能にあった事と思われます。

幼い横須賀時代英語の讚美歌を唱う家庭に生まれ、父の死後10歳より病に倒れる13歳まで耕柞は田村直臣氏の自営館の活版工場で働きながら、終日原稿を読み活字を拾い政治・経済・文学等あらゆる知識を鵜のみにしながらも字画問題を把握してゆきました。15歳の春より岡山の義兄、英人エドワード・ガントレット（長姉恒子の夫）の許で音楽と共にエスペラント語・英習字・速記術を学びとり、関西学院時代には早くも音楽の原書を読破出来る程「言葉」に対する並外れた才能を粘り強い努力によって会得していました。留学後は特有の語学習得法により短期間にドイツ語をマスターし、ベルリンで珍田大使より「外交官」に誘われる程卓抜した話術と語学力を確保していた様です。

その上、ドイツ王立音楽院のシュミット声楽教授の「発音と発声の訓練」・芝居見物では、ドイツの名優達のせりふによる「言葉というものの美しさ」を発見し、ヨーロッパからの帰途ロシアで知る「ダルゴムジスキの主張」等を日本の詩と音楽、日本語のアクセントやイントネーションと旋律の融合に役立たせ、まだ日本語のアクセントが「高低アクセント」である事実が言語学上解明されていない時代に、その鋭い耳で感覚的に感じ、独得の音楽語法を探り・確立してゆきました。又ドイツにしながら構築性・理論性など詩的要素に欠けるドイツ芸術に不満を抱き、芸術的デリカシー、感覚優先のフランス的なものに憧れていた事が若くして

フランス象徴派の色彩の強い詩をかいた北原白秋、フランス詩人、ジャン・アルテュール・ランボオ（1854—1891）と同じような素質をもつ北原白秋と共鳴した要因であったと思います。

1922年（大正11年）は歌の年でした。「かやの木山の」「六騎」「AIYANの歌（曼珠沙華）」「蟹味噌」…etc、日本歌曲の古典として永久に歌い伝えられてゆく珠玉のような芸術歌曲が白秋の詩の上に生み出されてゆきました。

印度の「パンチャ・タントラ」の中の「僧とねずみと鷹」のお伽話が英国小学読本に取り入れられ、そのヒントによって創られた白秋の「芥子粒夫人」^{ボス・トマニ}は、翌年1923年（大正12年）歌曲の中に耕柞の夢、「舞踊・演劇・絵画（舞台装置）・オーケストラ伴奏と音楽の融合」即ち「オペラ」を秘めながら、洋楽器の伴奏による新しい「浄瑠璃」という作曲者の意図のもとに「歌とピアノで描く童話」という特殊な作品として、プラトン社発行「女性」⁽³⁾に発表されました。耕柞の夢が歌曲の中で、これ程華麗に開花した作品は他にないと思います。

耕柞は幼い頃から「小さな歌の狂人」といわれた程で、成人して音楽にめざめてからは、作曲することがその人生の「願い」となりました。しかし、上野（現在東京芸術大学音楽学部）時代、彼は大変な貧乏学生であり、また彼に作曲を教える程の教師もなく、卒業後何とかして外国にゆき組織的に作曲を学びたいと願っておりました。チェロ奏者・東京音楽学校教師のウェルク・マイスター教授は、彼の卓抜した才能を認め岩崎小弥太男爵を説得、その後援を得て耕柞は、1910年（明治45年）シベリア鉄道でドイツに向い、ベルリンで世界最高の難関、ドイツベルリン王立音楽院^{ホホシユウレ}に合格し、1914年（大正3年）まで留学したのです。

当時ヨーロッパは、モーツァルト・ベートーベン時代に始まった近代化の成熟期にあり、新しい芸術が各分野にわたって胎動しはじめた時期でした。20世紀芸術の道案内ともいわれる抽象絵画の創始者、ヴァシリー・カンディンスキー（1866—1944）、フランツ・マルク（1880—1916）、マリイ・ロオランサン（1885—1956）等の「颯風社」^{シユトルム}に魅せられ、帰国の時同人の作品150点余を持ち帰り日本の美術界に紹介したのは山田耕柞であり、又、1912年（大正元年）画家・詩人・作曲家の生涯の親友、斉藤佳三氏とドレスデンのエミール・ジャック＝ダルクロウズ（1865—1950）の舞踊学校におもむき、合唱を指揮する僅か7歳位の小さい子供の手に本当の音楽が生きている事に感動し、言語によって伝達出来ない舞踊では筋肉運動で自己表現をする以外にない事を悟り、その後舞踊への関心を深め、石井漠氏との「舞踊詩」の創作・振付・作曲をして舞踊と音楽の融合を果たしたのも、山田耕柞でありました。

又、ドイツ語マスターのため始められた詩の朗読や台本研究の上の芝居見物は 畏友小山内薫氏の来独とも重なり、演劇への知識・理解を得、又、その根底の思想哲学まで啓蒙され、更に日本演劇界開発に対する彼の熱情は、山田耕柞を日本楽界開拓への決意に導いてゆきます。

「日本を音楽的に育てるには、交響曲や室内楽というような純音楽よりは、オペラや楽劇のような劇音楽によるのが捷徑だと考える—世界にも類のない歌舞伎という日本独得の伝統芸術を基礎として新しく生み出せば、ユニークな国民オペラを創造してゆく事が出来るかもしれない—自分は未開の日本楽壇の先達として一人の屯田兵として開墾の鋤を打ちこめばいいのだ。」と異国において燃えさかった青春の夢が、当時至難なオーケストラ（楽団）造り・作曲・演奏・

指揮・音楽講座・文筆活動・振付等 帰国後の目覚ましい活躍につながってゆきます。

しかし、その中で一番美しい結晶として残されたのは、その生涯の「静の時」から生まれた芸術歌曲なのです。そして芥子粒夫人は白秋のお伽話を通して耕作のオペラへの夢を秘めながら歌手とピアニストの間に、日本人独得の「以心伝心」「あ、うん」の呼吸から生まれる微妙な「間」を生命として成立っています。これは耕作作品の白眉の一曲といえましょう。

現在楽譜も絶版となり、演奏も至難なため減多にプログラムにのらないのは大変残念な事と思い、ここに楽譜を記載させていただきました。

「白秋が死んでから、僕はいい作品を書いていない。」

白秋との「出会い」が、山田耕作にとって、どんなに大きな意味を持っていたか、どんなに深い感動と共鳴をもって その心を音楽として語りつくしていったか、日本の近代芸術の上に前人未踏の輝やかしい足跡を残していった二人の天才達の遺産は、凄絶な苦闘の中で生まれながら童心を失わず、日本人の「心の詩」として、いついつまでも私達に語りかけてくれる事と思います。

〔注〕 (1)「白秋の童謡集」

『とんぼの眼玉』(1919),『兎の電報』(1921),『まざあ・ぐうす』翻訳(1921),『日本の笛』『祭の笛』(1922),『花咲爺さん』(1923),『子供の村』(1924),『二重虹』『からたちの花』『象の子』(1926),『月と胡桃』(1929),『赤い鳥童謡集』(1930)等。

白秋は、総数約1,200篇の童謡をつくりました。その内400篇が作曲されています。山田耕作をはじめとして、その詩は作曲家達に愛され、日本歌曲の世界に豊かな恵みを与えています。彼の童謡の原点は在来の日本の童謡、即ち「わらべうた」の姿を現代に生かす事よりはじまっています。

(2)「詩と音楽」

大正11年9月、耕作と白秋の共同主宰で創刊。毎号、詩と音楽と美術の三部門に分かれ、それぞれの面で白秋・耕作・山本鼎の三人が分担して執筆・編集にあたりました。しかし、大正12年9月、関東大震災で出版社の、白秋実弟鉄男のアルス社が焼失したため、10月に震災記念号を出して全12冊で廃刊となり大変惜まれました。

当時の錚々とした第一線活躍の詩人・音楽家・画家(室生犀星、野口米次郎、河井醉茗、日夏耿之助、竹友藻風、山宮允、三木露風、小山内薫、田辺尚雄、外山国彦、小杉未醒、山本鼎、等)達が顔を揃えて絢爛としたメンバーがその目次を飾っています。

(3)「女性」

明治14年(1881)山口県に生まれた中山太一氏は、明治36年(1903)後、神戸・大阪で商標を「クラブ」とする化粧品雑貨卸業をはじめ「中山太陽堂」を開設し、明治末年「クラブ歯磨」「クラブ白粉」を発表しました。その創業20周年事業の一環として「中山文化研究所」を設立し、女性文化活性化に大きな足跡を残しました。注目すべきものは、1922年「プラトン社」を併設し、雑誌「女性」を出版した事です。「芥子粒夫人」は、大正末年から昭和にかけて一章ずつ「からたちの花」と共にこの「女性」に発表されました。「女性」は、当時のエリート婦人雑誌で、山六郎と山名文夫のイラストレーターが描くモダンガールが乙女の心を引きつけ、都市の発展と共に社会に進出する女性の開花した化粧・美容・ファッションの華麗な文化を伝えてゆきました。

(4)「ダルゴムイジスキー・アレキサンダー Dargomijsky, Alexander (1813—1869)」

グリニカの国民的な古典的手法でなく、言葉の抑揚と声楽的朗読によって音楽表現の真実性と簡明さを声楽様式の中に達成する。ムソルグスキーの歌曲の師。

オペラ作品 ルサルカ・石の客 他に歌曲

I 山田 耕 筈 年 譜

年 号	西 暦	事 項
明治 4 年	1871	愛知県で謙造とひさ結婚? 半歳で謙造失踪。明治 7 年母と姉上京。明治10年ひさ受洗。
明治19年	1886	6 月 9 日耕作生。翌年横須賀に移る。明治22年大火で一家罹災。
明治25年	1892	7 歳 耕作尋常小学校に入学。一家は貧苦で転居を重ねる。
明治29年	1896	父逝去。満50歳。遺言により「巢鴨自宮館」に入る。
明治31年	1898	姉恒子E・ガントレットと結婚。
明治32年	1899	過労と栄養失調で肋膜炎となり自営館を退館。母と鎌倉で静養。「足かけ 3 年」魚釣行商をして歩く。
明治33年	1900	巢鴨教会牧師田村直臣より受洗。
明治34年	1901	16歳 岡山養忠学校に入学。翌年関西学院普通学部本科 1 年に転校。
明治37年	1904	19歳 作曲を独力で始める。母逝去, 60歳。9 月東京音楽学校予科合格。ガントレット氏学資提供。
明治41年	1908	23歳 4 月東京音楽学校本科卒業 (第19回生), 研究科に進学。
明治43年	1910	岩崎小彌太男爵の後援でドイツ留学決定。3 月ドイツ王立音楽院作曲科に合格。
明治45年	1912	小山内薫より芸術と遊蕩のデカダン生活を教えられる。
(大正1年)		ドレンデンに行き, ジャック・ダルクローズの舞踊学校を見学。舞踊詩運動の根底となる。
大正 2 年	1913	3 月, 音楽院卒業。5 月, 楽劇“墮ちたる天女”のドイツ上演確定。
大正 3 年	1914	帰国。山田アーベント開催。山田最初の管弦楽曲作品を発表。“曼陀羅の華”“かちどきと平和”
大正 4 年	1915	5 月 東京フィルハーモニー会管弦楽部第一回公演。永井郁子と結婚。
大正 5 年	1916	永井郁子と離婚。村上菊尾と結婚。弟子(近衛秀麿ら)の養成に当たる。
大正 6 年	1917	ベルジャ丸で渡米, 途中病気になりハワイ・ホノルル西本願寺別院で静養。
大正 7 年	1918	10月 ニューヨーク, カーネギーホールで自作の管弦楽曲を公演。
大正 8 年	1919	ニューヨーク近代音楽名誉会員。アメリカ演奏家組合名誉会員。
大正 9 年	1920	音楽劇研究団体として山田, 小山内薫, 近衛秀麿他百余名により日本楽劇協会創立。
大正11年	1922	37歳 歌の年。白秋・耕作により「詩と音楽」を創刊。
大正14年	1925	山田・近衛らにより日本交響楽協会結成。N響の基礎固まる。日露交歓交響管弦楽大演奏会開催。
大正15年	1926	日本交響楽団を結成。9 月, 日響分裂。
昭和 2 年	1927	白秋・露風・八十・雨情・柳虹らの詩による「童謡百曲集」刊行。
昭和 5 年	1930	5月12日耕作を耕作に改名。楽壇生活25周年を記念して歌曲・室内楽・舞踊・管弦楽を四夜にわたり上演。
昭和 6 年	1931	バリ・ピギヤル座の招きで渡仏。歌劇“あやめ”作曲の依頼を受ける。
昭和 8 年	1933	日本楽劇協会内に音楽と演劇の融和を図る為「金曜会」を結成。
昭和10年	1935	金曜会公演, ビゼー“カルメン”演出・指揮山田, 聴くオペラから観て聴くオペラに発展させた。白秋の生誕50周年を記念して山田の呼びかけて「北原白秋作詩による歌曲の夕」開催。
昭和11年	1936	1 月 フランス政府よりレジョン・ドヌール勲章を贈られる。
昭和12年	1937	相愛女子専門学校に音楽科設置 (後援・山田)。ドイツ演奏旅行。日独文化協会より功労賞。
昭和15年	1940	日本演奏家協会々長となる。東京宝塚劇場でオペラ“夜明け”(黒船)公演。
昭和16年	1941	朝日新聞社より昭和15年度「朝日文化賞」を贈られる。
昭和17年	1942	文部省から日本芸術院会員 (第 3 部) に推挙される。満州国建国10周年記念祭に招かれて渡満。
昭和20年	1945	(8月15日終戦)。疎開先の貴重な楽譜原稿・音楽資料の大半を空襲で焼失。
昭和22年	1947	歌劇“香妃”(シャンフエイ)完成。突然運動神経麻痺症にかかり半身不随となる。
昭和25年	1950	NHK・放送文化賞受賞。作曲生活50周年を記念して祝賀会。昭和27年“夕鶴”に第1回山田耕作賞贈る。
昭和31年	1956	71歳 辻 輝子と婚姻届出。11月文化勲章を授与される。
昭和35年	1960	作曲家生活60周年祝賀パーティー開催。
昭和39年	1963	第 1 法規出版株式会社より喜寿を記念し「山田耕作全集」を出版。翌年病状悪化し入院。
昭和40年	1964	12月29日死去。贈従三位, 銀盃一組ならびに祭糸料御下賜。戒名 響流院釈耕作。79歳 6 カ月。

Ⅱ 北 原 白 秋 年 譜

年 号	西 暦	年 齢	事 項
〈柳川時代〉(1885～1904)			
明治18年	1885		1月25日 今の福岡県柳川市で生まれる。本名 隆吉。
明治20年	1887	2	夏 チブスにかかりあやうく一命をとりとめる。
明治23年	1890	5	夏 全国にコレラ大流行。その体験が感覚の深くに影を落とし、後年の詩にしばしば恐怖感のイメージとなって現れる。
明治24年	1891	6	4月 矢留尋常小学校に入学。利発で神童の名をほしいままにした。
明治30年	1897	12	2年の飛躍で県立中学 伝習館に入学。(後にも先にも例のないこと)
明治33年	1900	15	歌作に入る。翌年回覧誌を発行、白秋と号す。
明治34年	1901	16	3月 沖端の大火に類焼、酒倉に満ちていた新酒古酒6000余石を焼尽。このため数年後には一家没落の悲運に見舞われる。
〈青春時代〉(1904～1912)			
明治37年	1904	19	3月 親友の中島鎮夫、露債の嫌疑を受けて自刃。白秋は詩人として立つ決意を固くした。父に隠れて上京し早稲田大学に入学。同級に若山牧水・土岐善麿。
明治39年	1906	21	「明星」に諸詩篇を発表。蒲原有明らに認められる。
明治40年	1907	22	与謝野 寛・吉井 勇・木下圭太郎・平野万里の五人連れで九州旅行。天草・切支丹遺跡を巡遊。
明治41年	1908	23	木下圭太郎・石井柏亭らと「パンの会」を興す。
明治42年	1909	24	「スバル」同人に、処女詩集「邪宗門」刊。実家(酒造業)破産。
明治44年	1911	26	「思ひ出」刊(上田 敏氏激賞)。「朱楽(ザムボア)」を主宰、発刊。名実共に詩壇の第一人者となる。
〈遍歴の時代〉(1912～1920)			
明治45年	1912	27	一家上京。松下俊子との恋愛で告訴、拘留される。
大正2年	1913	28	処女歌集「桐の花」刊。俊子と結婚。一家で三浦三崎に移住。「東京景物詩及其他」刊。
大正3年	1914	29	小笠原に移る。帰京後、貧窮の中で俊子と離別。
大正4年	1915	30	弟 鉄雄と阿蘭陀書房設立。「ARS」を主宰、創刊。「雲母集」刊。
大正5年	1916	31	江口章子と結婚。紫烟草舎で「烟草の花」創刊。赤貧洗うがごとき生活続く。東洋的閑寂の境地。
大正6年	1917	32	アララギ 島木赤彦氏と絶縁。
大正7年	1918	33	小田原在住。鈴木三重吉の「赤い鳥」創刊に協力。翌年童謡集「トンボ眼玉」刊。漸く貧窮を脱す。
大正9年	1920	35	章子と離婚。「雀の生活」「白秋詩集Ⅰ」刊。
〈壮年時代〉(1921～1934)			
大正10年	1921	36	佐藤菊子と結婚。山本鼎らと「芸術自由教育」創刊。「雀の卵」、イギリス童謡の訳詩集「まざあ・ぐうす」などを刊行。
大正11年	1922	37	山田耕筈と「詩と音楽」創刊。民謡「日本の笛」刊。長男 隆太郎誕生。
大正12年	1923	38	「水墨集」刊。童謡集「花咲爺さん」刊。関東大震災で山荘半壊。
大正14年	1925	40	樺太旅行(のち紀行「フレップ・トリップ」刊)。長女 童子誕生。
大正15年	1926	41	「近代風景」主宰創刊。童謡集「からたちの花」刊。
昭和4年	1929	44	「海豹と雲」刊。アルス版「白秋全集」刊行開始。
昭和5年	1930	45	童謡、民謡、歌謡の流行とともに白秋の名声はますます高く、国民詩人の名を冠されるようになる。
昭和9年	1934	49	白秋全集 全18巻完結。第三歌集「白南風」刊。
〈豊熟の時代〉(1935～1942)			
昭和10年	1935	50	「多磨」を主宰発刊。10月14日、文壇・楽壇・画壇など芸術各界の発起で白秋生誕50年記念「白秋を歌ふ夕」を日比谷公会堂で開催。
昭和12年	1937	52	眼底出血で入院。薄明の世界が始まったが創作活動は旺盛。
昭和14年	1939	54	二千六百年奉祝歌曲及び舞踊の創定委員に選ばれる。
昭和15年	1940	55	「黒繪」「新頌」刊。「海道東征」が信時 潔の作曲により東京音楽学校(現 芸大音楽学部)で初演奏。
昭和16年	1941	56	河出版「白秋詩歌集」刊。「海道東征」に対して「福岡日日新聞」の文化賞を受ける。 5月 芸術院会員に推される。
昭和17年	1942	57	年頭より腎臓病、糖尿病、急激に悪化して心臓喘息の症状を呈し11月2日没。勲四等に叙され瑞宝章が授けられる。多摩墓地に埋葬。

Ⅲ 大正期における社会情勢と山田耕筈の活躍

	西暦	年齢	社会情勢	山田の音楽活動	私的生活
明治 45	1912	27	7月 明治天皇没(61歳)大正と改元(30日) 9月 全国にコレラ流行	<ul style="list-style-type: none"> ・交響曲「かちどきと平和」の主題成る。 ・小山内薫より芸術と遊蕩のデカダン生活を教えられる。 ・斉藤佳三とドリスデンに行き、ジャック・ダルクロウズの舞踏学校を見学。舞踏詩運動の根底となる。 ・坪内逍遙「墮ちたる天女」を歌劇化しドイツ上演を約束。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年来の友、画家・詩人・作曲家の斉藤佳三と演劇の小山内薫来独 ・自分の才能の乏しさと音楽に対する懷疑から他の道に入ろうかと悩む。 ・シュミット一家とバルト海のデアハーゲンに避暑 ・斉藤の影響で美術に対する開眼、カンディンスキー他、印象派・表現派の絵画を連日勉強する。 ・クリスマスの夜、シュミット・ドロテアと婚約。
大正 2 3	1913 1914	28 29	8月 ハーグで万国平和会議 8月 第1次世界大戦(1918年まで)対独宣戦布告	<ul style="list-style-type: none"> ・未来社主催、山田アーベント開催、歌劇「七人の王女」「墮ちたる天女」の一部演奏 ・東京フィルハーモニー協会、恤血シンフォニー音楽会、山田最初の管弦楽曲作品を発表、「曼陀羅の華」「かちどきと平和」。 ・山田の蒐集したドイツのシュトルム社(颯風社)の作品150点を展示、日本美術協会、和田英作協力。 	<ul style="list-style-type: none"> ・モスクワでスクリアピンの「詩曲」に感激する。 ・1月24日 帰国 ・戦争のためドイツに行く事が不可能になる。
4	1915	30	5月 日本の要求通り、日華新条約調印	<ul style="list-style-type: none"> ・東京フィルハーモニー会管弦楽部第一回公演。帝劇、山田の指揮により毎月一回の演奏会始まる。交響曲運動の基礎となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・永井郁子と結婚。 ・「新式首程視唱教本」(大阪 開成館) 発刊。
5	1916	31	2月 独・仏ヴェルダン攻防戦 8月 鄭家屯で日華両軍衝突		<ul style="list-style-type: none"> ・永井郁子と離婚。
6	1917	32	3月 ロシア2月革命 11月 ロシア社会主義革命、ソビエト政権となる。 12月 独ソ休戦	<ul style="list-style-type: none"> ・山田耕筈ピアノ作品発表を度々行う。 ・ベルジャ丸で渡米、途中病気になりハワイ・ホノルル西本願寺別院で静養、多くの仏教聖歌を作曲。 	<ul style="list-style-type: none"> ・村上菊尾と結婚。 ・長女 美沙生まれる。
7	1918	33	7月 「赤い鳥」創刊 11月 第1次大戦終了。大戦景気おわる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ニューヨーク・カーネギーホールにて自作の管弦楽曲のみを公演。ニューヨーク・シンフォニー・オーケストラおよび合唱協会コーラスを指揮して、東洋人初の演奏会・合唱曲「秋の祭」、交響詩「暗い扉」「曼陀羅の華」、組曲「マリア・マグダレーナ」その他。 	<ul style="list-style-type: none"> ・永井郁子は日本歌曲の独唱会に力を入れる。山田の子 永井文子誕生。 ・日本を脱出 ・堀内敬三と会い、生涯の親交を続ける。
8	1919	34	3月 ムッソリーニ、ファシスト党結成	<ul style="list-style-type: none"> ・カーネギーホールで第二回演奏会「かちどきと平和」「マリア・マグ 	<ul style="list-style-type: none"> ・意気揚々とアメリカ陸軍様式のカーキ色の服を着て帰国。

	西暦	年齢	社会情勢	山田の音楽活動	私的生活
昭和2	1920	35	6月 ヴェルサイユ講和条約	「ダレーナ」絶大な成功を納める。 ・ニューヨーク近代音楽名誉会員、アメリカ演奏家組合名誉会員、ニューヨークディッペル歌劇団総指揮者に推薦。	・同志と共に何とかして歌劇をやろうと考える。
			1月 国際連盟成立	・山田耕柝、近衛秀麿、石川義一らにより日本作曲家協会を設立。	・長男 耕一生まれる。
			2月 ヒットラー、ナチス党結成	・山田アーベント「牧神音楽会」第一回演奏会、丸の内保険協会。	・大橋房子との激しい恋に陥る。彼女の詩「寂しき夜」を作曲。
	1921	36	3月 戦後恐慌勃発、失業者増える。	・音楽劇研究団体として山田を中心に、小山内薫、岡田三郎助、近衛秀麿、土方与志他百余名により日本楽劇協会創立。上演。	・宮原慎二、大中寅二が弟子入り、しかし山田は月謝を一切とらない。
			11月 ワシントン会議（1922年まで）		・第1次大戦後の欧米の音楽事情視察目的の漫遊。
	1922	37	12月 日英同盟廃棄		
			7月 日本共産党、秘密結社として創立	・白秋・耕柝により、「詩と音楽」を創刊。当時活躍の詩人・音楽家・画家が顔を揃え絢爛。	・欧州より帰国、重病となる。大橋房子との愛の破局？ ・「近代舞踊の烽火」「作曲者の言葉」（アルス）発刊。
	1923	38	10月 シベリア撤兵		
			1月 「文芸春秋」創刊	・山田作品発表大演奏会・岡崎公園演奏会。	・「音楽講座（全6巻）」（日本作曲家協会）発刊
			4月 「赤旗」創刊 9月 関東大震災	・ハルビン行き（日露交歓大音楽会上演のため）。	・白秋の弟 鉄雄経営の出版元アルスが潰れ「詩と音楽」休刊。
昭和2	1924	39	1月 国民思想善導会設立	・日本交響楽協会設立、日比谷公園音楽堂において日本交響楽協会管弦楽団演奏、山田耕柝指揮。	・関西での活躍が多い。藤原義江帰京、山田作品を盛んに演奏、活躍しはじめる。「芥子粒夫人」作曲
			11月 東京放送局の設立	・山田耕柝歌曲発表音楽会・報知講堂ホール。 ・山田アーベント開催。	・「教育に於る舞踊と音楽」「音楽の法悦境」（イデア書院）発刊。
	1925	40	1月 日ソ国交回復（芳沢・カラハーン協定）	・山田耕柝・近衛秀麿らにより、日本交響楽協会結成。N響の基礎固まる。	・「生れ月の神秘」（実業の日本社）発刊、当時珍しかったのか20版以上を重ねベストセラーとなる。周囲の人、随分改名させられる。
			12月 日本プロレタリア文芸連盟創立。	・日露交歓交響管弦楽大演奏会、歌舞伎座。	
	1926	41	3月 日本農民組合分裂。労働農民党結成。	・日本交響楽団を結成。第一回予約演奏会（日本青年館・近衛秀麿指揮）「英雄」	・麻布新網町において次女 日沙生まれる。
			12月 大正天皇没（25日）昭和改元	・日響分裂	・日響分裂に関して山田への同情派と反感派が渦巻いて連日新聞紙上を賑わせる。大金16万円の借財を背負う。
	1927	42	3月 金融恐慌はじまる	・小山内薫原作・監督による初の音声映画「黎明」の音楽を担当、帝劇で試写会。	・大橋房子、芥川龍之介の媒酌で作家 佐々木茂索と結婚、ショックを受ける。
			5月 第一次山東出兵、これ以後中国に排日運動激化	・白秋・露風・八十・雨情・柳虹らの詩による「童謡百曲集」刊行。この頃「この道」「あわて床屋」「赤とんぼ」などの数々の名曲できる。	

「日本洋楽100年史」「この道 山田耕柝伝記」「はるかなり青春のしらべ」より引用

Ⅳ 山田耕筰の歌曲

・第1期

第1期の中心的スタイルは、ヨーロッパの古典派かロマン派の歌曲を模倣したものである。その意味ではまだまだ彼独自のものを出すにはいっていない。この時期の問題点は日本語をどのように扱うかということで、ヨーロッパ風のメロディーと日本語を結びつけるため、英語やドイツ語の詩を多く扱って模索した。その間、三木露風の詩集「廃園」の10曲目の「唄」を作曲した時に言葉とメロディーの融合について開眼するところがあったらしい。

作 品 名	作詞者	製作年	作 品 名	作詞者	製作年
嘆 き	三木露風	1910	唄	三木露風	1916
翼の凱歌	〃	〃	野 薔 薇	〃	1917
ふるさとの(廃園より)	〃	1911	澄 月 集	寺崎悦子	〃
風ぞゆく			→ジョージ・バス、テオード・ベカ英訳		
信仰と牢獄	三木露風	1913	A CYCLE OF FIVE JAPANESE LOVE-SONG		

・第2期

第2期は、はっきりと日本的な表現を意識して自分らしい音楽語法を探り確立し熟させ傑作に稔らせた時代である。有名な「赤い鳥」や「金の星」を中心とする童謡運動なども起こり、伝統音楽の側では新日本音楽や新民謡の運動が起こって、伝統音楽を近代化する動きが表面化してきた。彼の歌曲の基本的音階は、都節音階とヨナ抜き長音階の2種類で、又ハーモニーの面では、七の和音とその転回形が多く、九の和音もしばしば現われる。こうして芸術的な歌曲の手法を拡張する一方、童謡運動の側からの刺激によって、童謡も作りはじめた。

作 品 名	作詞者	製作年	作 品 名	作詞者	製作年
寂しき夜の歌	大橋房子	1920	待ちぼうけ	北原白秋	1923
幽 韻(五章)		1919・22	ペイチカ	〃	〃
風に寄せてうたえる春の歌	三木露風	1920	からたちの花	〃	1925
かやの木山の	北原白秋	1922	箱 根 の 山	野口雨情	1926
六 騎	〃	〃	赤 と ん ぼ	三木露風	1927
AIYANの歌(曼珠沙華)	〃	〃	こ の 道	北原白秋	〃
蟹 味 噌	〃	〃	砂 山	〃	〃
病める薔薇	三木露風	〃	燕	川路柳虹	〃
木 の 洞(うろ)	〃	〃	二 十 三 夜	野口雨情	〃
明日の花	大木惇夫	〃	箱 根 八 里	日本民謡	〃
馬 売 り	北原白秋	1923	佐渡おけさ	日本古謡	1928
鐘が鳴ります	〃	〃	中国地方の子守唄	〃	〃
芥子粒夫人(ポストマニ)	〃	〃	松 島 音 頭	北原白秋	〃

・第3期

大正11年をピークに、歌曲作品で勝負するという構えは次第に薄れた。それは彼の関心がオーケストラやオペラに傾いたためである。又、復刊した「赤い鳥」に「ロシア人形のうた」など、一連の童謡を発表するなど、手なれた技法でわかりやすい作品を戦後まで書き続けた。

作 品 名	作詞者	製作年	作 品 名	作詞者	製作年
ロシアの人形のうた 1. 水樋 2. 娘さん 3. 乳母 4. 牛 5. 母	北原白秋	1931	兵士の妻の祈り	西条八十	1940
			みぞれに寄する愛の歌	大木惇夫	1947

・編 曲

作 品 名	作詞者	製作年	作 品 名	作詞者	製作年
かぞえ歌	日本民謡	1918	さくらさくら	日本古謡	1918
荒 城 の 月	土井晩翠	1924			

V 芥子粒夫人（ポストマニ） 北原白秋 詩 童謡集「象の子」より
プラトン社「女性」に発表

I. 綺麗な綺麗なちび鼠	大正12月11月6日
II. 王さま馬で通られる	大正13月6月18日
III. 今は御殿で女王さま	大正13月8月10日
IV. とても不思議な緑の芽	大正13月6月19日

『これは四部から成るインドのおとぎばなしを基とした演奏時間30分にも及ぶ長大な譚詩曲である。恐らく、この種の譚詩曲としても古今を通じて最大なものの一つではあろう。それだけにその演奏は容易でない。

この曲で私は、洋楽的譚詩曲の型によるものよりも一層邦楽的手法や技法を採り入れて洋楽器の伴奏による新しい浄瑠璃ともいふべきものを生もうと心がけた。それ故この曲の演奏者はこの私の意図を尊重して洋装和魂の実を上げるよう努められたい。

中 略

それに作者白秋の素純ともいわれるべき叙述に於ける簡略法や微細華麗な表現を余す処なく描出することを忘れてはならない。伴奏などもむしろ歌声部を誘導する心構えで演奏すべきであろう。直言すればこの曲における歌声部と伴奏部はコンチェルトにおける独奏と管弦楽の關係にひとしい。

— 山田 耕筈 —

1

ガンジス河の畔りのむしろ小屋に住む魔法使いラシと仲よくたわむれるちび鼠が登場。白秋は巧緻な筆によって、夢に憧れた幼い日の追憶を、ちび鼠の生活を通して心にくいまで豊に描いていきます。猫より犬に猿・野猪にとラシの一振りの魔法の杖で変身してゆくちび鼠も、やがて美しい娘になりたいと訴える様になります。

2

馬も王様もポストマニもメルヘンの中で息づいています。玩具の馬の軽やかなギャロップで幕はあき、美しいしなを作りながら語りかけるなまめかしいポストマニに魅惑された王様は、終に結婚を決意するのです。

3

この譚詩曲の頂点で劇的な要素に満ちています。

今や魔法の杖によって奇しくも王様と結婚したちび鼠は、華麗な王宮で新婚の楽しい生活を始めています。自分の前身に対する不安に怯えながらも、彼女が静かな庭園の池のほとりで自らの美しさに見とれ酔ひ痴れている時、突然親鼠達が現れ思いがけない悲劇の終末へとむかうのです。

4

一切の悲劇は、魔法の杖によって引き出されたのです。魔法使いラシは、白い歯をむき出して快心の笑を樂しみます。不思議な事に、池のほとりには、色とりどりの芥子の花が見事に咲き溢れ、「芥子の先祖・ポストマニのお話」は、華麗にその幕を閉じてゆきます。

歌 詞

1

「綺麗な綺麗な ちび鼠」
おまえにお話さしてあげよ」
魔法つかひは呪文をとなへ
さあさあお食べよ、米の粒

魔法つかひとちび鼠
お話しいい暮らしでた
ガンジス河の堤の上の
棕櫚のお小屋のむしろ小屋

それもしばらくちび鼠
悲しくなったでちゅうちゅうちゅう
「変へてくだされ、鼠にゃあいた」
「なにになりたい」
「なににでも」
「猫にしてやろ」
「にゃんにゃんにゃん」
猫になります、ちび鼠

「変へて下され、猫にもあいた」
「なにになりたい」
「なににでも」
「犬にしてやろ」
「わんわんわん」
犬になります。三毛猫が

「変へて下され、犬にもあいた」
「なにになりたい」
「なににでも」
「猿にしてやろ」
「きゃっきゃっきゃっ」
猿になります、むく犬が

「変へて下され、猿にもあいた」
「なにになりたい」
「なににでも」
「野猪にしてやろ」
「ふうふうふう」
猿が野猪に変わります

「変へて下され、美しい人に、ああ、
ああ野猪はいやらしい」

そこで一と振り、魔法杖
見れば綺麗な娘の子
真赤な練絹、ふさふさ黒髪
金の腕輪や髪かざり

綺麗な綺麗なその娘
芥子粒夫人と名がついた
今度は楽しいお邸ずまひ
棕櫚の葉お小屋はふり棄てる

2

王さまお馬で通られる
花に水かけ、芥子粒夫人
「紅い果実さしあげます、陛下お入り
なさいませ」

「おお、美しい、ありがとう」
王さま馬からお下りになる
「紅い果実はまだ食べぬ。お前の親たち
訊いてから」

わたしの親たちちび鼠
とは、云ひにくい、はづかしい
「きっと女王になる人と、魔法つかひが
申します」

「お前の名まへは」
「はい、陛下、芥子粒夫人と申します」
「よしよし、おまへと結婚しましょ」
魔法つかひも「こりゃ目出度う」

3

今は御殿で女王さま
それでも、おづおづ、芥子粒夫人
「いまに知れたらどうなるでしょか、
わたしや嘘つきすぐ知れよ」

ある日、木かげに腰かけて
お菓子たべたべ見とれてた
真赤な練絹、ふさふさ黒髪
お池に映った水鏡

すずしい銀色、絹ヴェール
桃いろ、紫、玉かざり
つくづく見とれて
「まあまあ御覧、
なんと綺麗な女王さま」

そこへちよろちよろ、ちび鼠
お砂糖の一かけいただこか
「しっしっ、あっち行け、
いやらしい鼠」

すると鼠はちゅうちゅうちゅう
「おまへわたしを知らないの」
「いえいえ、知りやせぬ、なんの知ろう」
いやな顔して女王さま
「お前は母さんお忘れか
ほれほれ、お父さんも来ているよ」

またも鼠ちよろちよろ出て来て
「おおお出世じゃ、これ娘」
「わたしの婿さま、王さまだ」
「おれも会ひたい王さまに」

「婿だ、舅だ、お喜びなさろ
 おまへ会わせにゃ、わしらゆこ」
 「あらまあ、父さん、お母さん」
 元は娘のちび鼠
 「どうしょう、どうしょう、もう嘘知れる」
 ふらふら目はし、池の中
 鼠の両親こりゃどうじゃ
 ちゅうちゅう、どうしょう、なぜ死んだ
 わけもわからず飛んで行た駈けた
 泣き泣きラシさん呼びに行た
 魔法つかひのランが来りゃ
 王さま泣き泣きござらしゃる
 「陛下、まずまずことを云へば、芥子粒
 夫人こそちび鼠」
 「お亡くなられた芥子粒夫人
 あきらめあそばせ、仕方ない」
 「なにかいいことござりましょござろ
 今にしあわせ、うめ合せ」

とても不思議な緑の芽
 間もなくお庭に茂ります
 見る見る見事に、魂げるばかりに
 咲いたは、咲いたは芥子の花

芥子粒夫人こそ女王さま
 女王さまこそ、芥子の花
 真赤な練絹、生絹のヴェール
 桃色、紫、真珠いろ

とても不思議な芥子の花
 誰もはじめて芥子の花
 これが世界の芥子の先祖よ
 印度のお話、芥子粒夫人

北 原 白 秋 評

『世には人が多い。が、白秋のように童心に生きた人はまれだ、だからこそ彼には神が宿るのだ、彼はいつでも大人の衣を脱いで、素肌のこどもになれる人だった』

— 山田 耕筈 —

この人は表現の火山であった。この人は表現に憑れてゐた。思想が感情が、内に滾^{たぎ}り立ち、満ち溢れ、どっと一度におし寄せて、彼の口を吃らせ、彼の手をわななかせ、彼の目を吊り上げさせるのであった。彼は一時に絵をかき、謡ひ、舞ひ、即興の詩を作った。会つてこれほど忙しい人はまたとなかった。表現が次から次と続いて、とめどがないのである。もし又表現しなかったら、この人は必らず窒息したにちがひなかった。或ひは爆発したにちがひなかった。彼の内に燃えさかる感動の火炎は、表現以外のはけ口を見出さなかったのである。この人こそは詩人であった。

— 堀口 大学 —

だれもが認めるように、白秋の業績の特徴は並はずれた多産・豊饒性にある。白秋はそのためにかえって不幸でさえあった。詩・短歌・エッセー・批評・童謡・民謡・装幀・編集——どれをとっても彼は群峰にぬきんでていたから、孤独だった。今では彼が、日本近代の美意識の爛熟と高雅を、最も創造的な芸術家のみが保ちうる高水準において体现していた一大山脈そのものであったことは明らかである。

— 大岡 信 —

Ⅵ 「芥子粒夫人」における登場人物と速度標語・調性

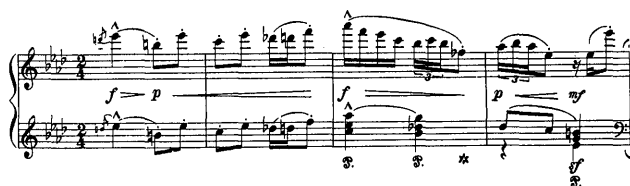
小節番号	登場人物	速度標語	メトロノーム	Dynamic	調
〈Ⅰ〉		$\frac{2}{4}$, C, ϕ			
1	前奏	Allegretto leggiero	$\text{♩} = 138$	①	As dur
5			$\text{♩} = 100$	大変細かく指示されている	
7		Più lento	$\text{♩} = 88$		
9	語り手	Allegro moderato	$\text{♩} = 100$	②	
25		Poco lento		感情的なものを <i>ff</i> で表現	
27		Tempo I ^{mo}	($\text{♩} = 138$)	③	
35		Meno		内心の動きは <i>pp</i> で表現	
39		Più lento			
42		Tempo I ^{mo}	($\text{♩} = 138$)	④ < > を多く使用	
50	語り手	Lento un poco	$\text{♩} = 66$		
54	語り手	Più mosso			
59	ちびねずみ, 魔法使い	Molto meno	$\text{♩} = 52$		f moll
65	ちびねずみ	Un poco piu mosso			
67	魔法使い	Molto meno			
70	語り手	Tempo I ^{mo}	($\text{♩} = 138$)		As dur
82	猫	Più mosso	$\text{♩} = 112$		
86	魔法使い, 猫	Molto meno			
94	語り手	Allegro moderato	$\text{♩} = 100$		Es dur
100	犬, 魔法使い	Poco meno			
107	魔法使い	Piu mosso	$\text{♩} = 112$		
116	語り手	Poco meno			E dur
121	猿, 魔法使い	Più lento			As dur
129	語り手		$\text{♩} = \text{♩}$	<i>fff</i> 1小節	E dur
137	野じし		$\text{♩} = 69$		cis moll

小節番号	登場人物	速度標語	メトロノーム	Dynamic	調
149	間奏	Tempo I ^{mo}	(♩=138)	<i>ppp</i>	As dur
153			♩=100		
155		Più lento	♩=88		
157	語り手	Allegro moderato	♩=100		
173	↓	Poco lento			
175		Tempo I ^{mo}	(♩=138)		
191		Più lento			
192—198	後奏	Vivissimo		<i>fff</i> 1 小節	
〈Ⅱ〉		$\frac{2}{4}$, C, $\frac{3}{4}$			
1	語り手, ポストマニ	Allegro scherzando	♩=92		Fis・E dur
28	ポストマニ	Un poco piu lento			E dur
31		Tempo I ^{mo}	(♩=92)		
36	王様	Largo	♩=66	<i>ppp</i> 1 拍	H dur
40	語り手	Tempo I ^{mo}	(♩=92)		E dur
47	王様	Poco meno			e moll
55	ポストマニの内心の動き	Molto mosso			E dur
59	ポストマニの内心の動き	Meno mosso			
63		Tempo I ^{mo}	(♩=92)		E dur
67	ポストマニ	Più lento			
77	王様, ポストマニ	Più lento			Des dur
86	王様, 語り手	Tempo I ^{mo}	(♩=92)		E・As dur
90		molto riten.			E dur
91—92	後奏	Tempo I ^{mo}	(♩=92)	<i>fff</i> 1 拍	E dur
〈Ⅲ〉		C, $\frac{2}{4}$, $\frac{6}{4}$			
1	前奏, 語り手	Largo gravemente	♩=52		B dur
9	ポストマニ	Più mosso	♩		E dur
15	語り手	Andante graziosamente	♩=66		
23	語り手	Più mosso	♩=126		
37	語り手	Meno mosso	♩=108		G dur
49	ポストマニ	con larghezza			E dur

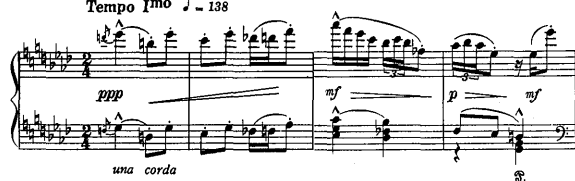
小節番号	登 場 人 物	速 度 標 語	メトロノーム	Dynamic	調
51	ポストマニ	Allegro vivace	♩ = 138		
59	語り手, ポストマニ	Allegrett quasi Andante	♩ = 100	ppp 1 小節	A dur
66	語 り 手	Più lento			E dur
70	母ねずみ	Più mosso			A dur
72	ポストマニ, 語り手	Meno mosso			
78	母ねずみ	Allegretto inquieto	♩ = 108		E dur
82	母ねずみ, 語り手, 父ねずみ	Più lento		fff 1 拍	E・D dur
98	母ねずみ, 父ねずみ	Allegro molto	♩ = 138		D dur
102	母ねずみ, 父ねずみ	Più largamente			
106	父ねずみ	Più lento			
109	ポストマニ	Meno mosso			
111	語 り 手	Più lento			D dur
113	ポストマニ, 語り手, 母ねずみ, 父ねずみ	Più mosso			
130	語 り 手	leggero	♩ = 108	ppp 1 拍	E dur
141	間 奏	Andante misterioso			As dur
145	語り手, 魔法使い	Largo gravemente con tristezza Come primo			Ces dur fis moll
163	魔法使い	Come I ^{mo}	♩ = 52		
171—179	後 奏			ppp 2 拍	B dur
〈IV〉		$\frac{2}{4}$, C			
1	前 奏	Allegretto leggiero	♩ = 138		As dur
8	語 り 手	Meno mosso			
23	↓	Poco lento			
24		Tempo I ^{mo}	(♩ = 138)		
30		Poco meno			
38		Più lento			
45	間 奏	Poco lento			
49	↓	Lento			
52	語 り 手	Tempo I ^{mo}	(♩ = 138)		
60	↓	Tempo I ^{mo}	(♩ = 138)		
67—72	後 奏	Vivissimo			As・D・As dur

Ⅶ 主 な Thema

- A ポストマニの性格を示す華麗な中にどこことなく暗い陰をひく主題。
終曲まで原形のまま、ディーナミックのみ変化させて、五回現われます。



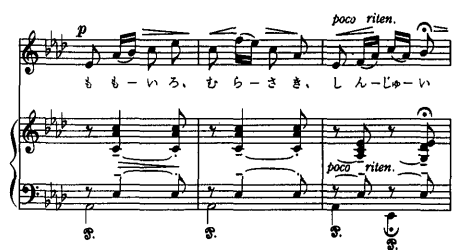
Tempo Imo ♩ = 138



Andantino misterioso



- B チビネズミの踊りのリズム
変身の喜びから、終曲語り手の伴奏として、音域を拡大してゆきます。

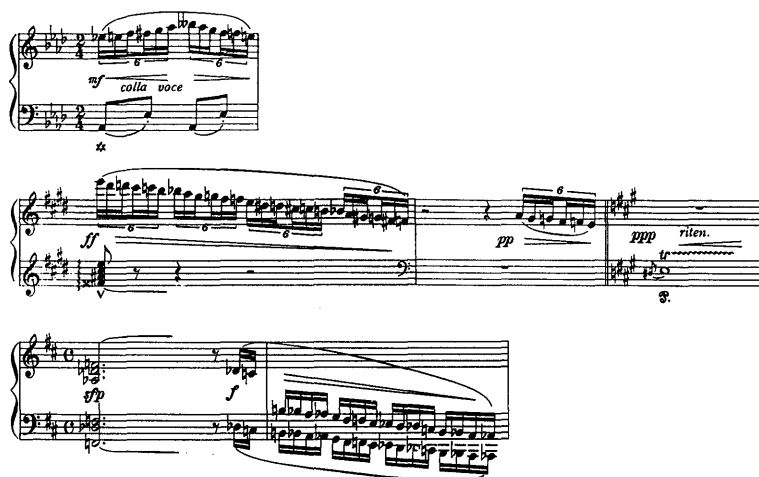


Tempo Imo
ben ritmico



C 半音階の動き

始めはチビネズミの軽やかなとび走る様を描いていますが、次第に微妙な内心の動きや 劇的な表現に使われてゆきます。



D I章で1小節ずつ転調して現われたこのモチーフはII章できれいなきれいな娘のテーマになり、III・IV章では思い出としてちりばめた宝石の輝きの様に、魅惑的に曲を色どります。

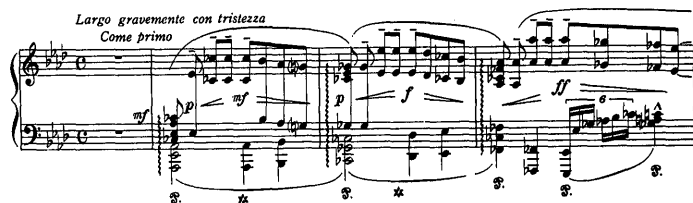


E 女王ポストマニの主題

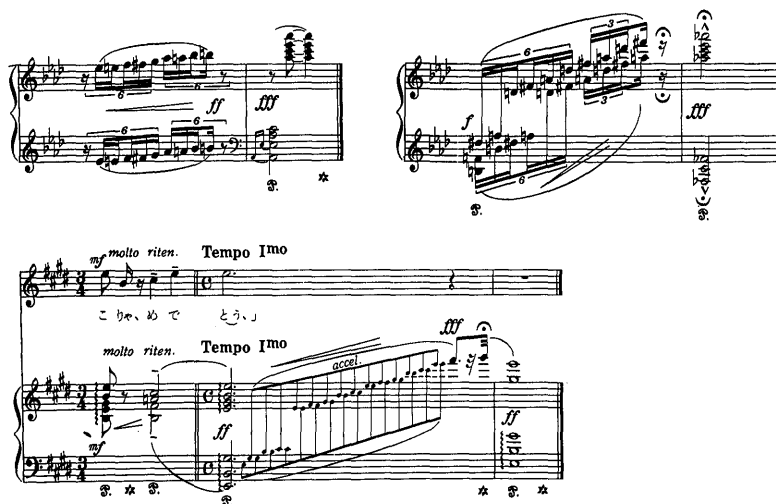
幸福の絶頂の女王ポストマニの主題は 莊重華麗な中に前身への不安なおのきを背景に、悲劇を暗示しているのでしょう。哀愁味を漂わせています。左手のアルペジオがメロディーの一つの線に華やかさと新妻の初々しい喜びを秘めています。



mollになった主題はむせぶ様に繰返され、激しいデューナミックは Bass のアルペジオを冒頭と異り一拍目のみに残して、慟哭を秘めて流れてゆきます。



F I・II・III章の終結部は 各章の間で一回しか使われないfffを使用し、上行の緊迫した音型で結ばれます。



VIII 演奏上の要点について

① 作曲技法

都節音階・ヨナ拔長音階・民謡音階・律音階に変化音を混ぜて使う事により、近代的陰影のあるメロディーを作り、和音はそのメロディーにある音を中心に組合せ、必ずしもヨーロッパの和声学の原理にこだわらない方法で作曲。スクリアビン・後期ロマン派・ドビュッシー等を部分的に入れていきます。7の和音の転回・9の和音・増和音・減和音を多く使っています。

「この道 山田耕筰伝記」より引用

② 演奏所要時間が、ほぼ30分を用する程長大なので、日本人特有の起承転結の構成の美感覚を把握する事です。

長さを感じさせない配慮のいる第Ⅰ章。娘(ポストマニ)と王様の心理描写を巧みに表現する第Ⅱ章。長い緊張感が女王ポストマニの突然の死によって、思いがけぬ結末となり、深い愁いをこめて語られてゆく、全曲中最も耽美的なピアノのアリアが、この曲の頂点になっています。この第Ⅲ章の後、リズムカルな第Ⅳ章はあっという間に「落」をつけて終ります。

③ Dynamic は短いフレーズの中で激しい起伏を持ち、作曲者は sfff・ffsf・ffp・sfpp 等独得の記号で、歌舞伎の「折」(柏子木)、邦楽の「太鼓」の擬音効果を出しています。演奏者は、歌舞伎・邦楽・能等の日本伝統芸術に深い関心と理解をよせている事が肝要です。

④ 歌手は、語り手・ちびねずみ・魔法使いラシ・変身してゆく動物(猫・犬・猿・野猪)・きれいなきれいな娘・王様・女王様・親ねずみ(父・母)……等、一人で十二役を歌い分ける声音の変化・演技力を持っていなければなりません。

その上、一つのフレーズの中で、一つのプレスの中で対話があり、多様な間奏からの「入り」と「切り上げ方」に洗練された手際のよさが要求されています。

オペラの要素を含みながら、幅広いオーケストラの響の中で歌えるのでなく、「歌曲」としてピアノパートと同等の立場で、その動きに充分な配慮を持ちながら、音楽の流れをつくってゆく難かしさに加えて、「音域の広さ」も必要とされています。

⑤ ピアノパートは歌同様、千変万化するタッチの多彩さが必要です。フランス音楽を好んだ耕筰の感覚的な、詩的な軽やかさと華麗さを伴う音色で、ガンジス河畔、出会いのある御屋敷、王宮……と舞台装置を彷彿とさせてゆく絵画性も要求されています。

演奏は、以上の事に留意しながら、歌手とピアニストの間に「話しても解らない、話さなくても解る」という日本人独得の「以心伝心」「あ、うん」の呼吸が大切であり、又全曲にちりばまれている「微妙な間」の絶妙な処理がこの難曲を佳境に導いていく「コツ」となっています。

大正十三年といえずいぶん古い話になるが、その時私は旧制高等学校(八高)の二年生で名古屋にいた。その年の多分秋だったと思うが、当時名古屋第一の劇場であった御園座(みそのぞ)で山田耕筰先生の作品発表音楽会があった。現代ならば、東京ならずとも少なくとも大都市なら頻繁に音楽会が開かれても別に珍しくないが、その当時とすれば地方の都会でこういった音楽会が開かれることはごく珍しいことだった。そこで私は破れ帽子にほうば(高下駄)をガラガラさせながら、芝居小屋といった方がよさそうに思えたその御園座に出かけていった。

さてその時はもっぱら山田先生の歌曲が発表されたし、歌手も女の方であったというだけではっきりおぼえていないが、袴をつけて颯爽たる和服姿の山田先生がピアノの伴奏を弾かれたその情景だけは、いまだ私の網膜にはっきりきざまれている。

ところでその夜、私の心を感激でいっぱいにした先生の作品は、なんといっても「芥子粒夫人(ポストマニ)」だった。

シューベルトの「魔王」の伴奏の部は別として、私がある頃学んだいわゆる歌曲なるものの伴奏部は、単に和声学的に組立てられた単純なものが多く、伴奏部までが詩の内容を物語るような歌曲を全くきいたことのなかった私は、この「芥子粒夫人」の耳新しい伴奏にすっかり魅了されてしまった。

この音楽会の印象があまりにも強かったので、「作曲」というものに対するあこがれが私の心を強くゆさぶりはじめたのである。その頃から私は音楽の本、特に音楽の理論を書いた本を読みあさり始めたし、将来は作曲家になろうというとてもない熱望をいだくようになったし、まもなくこの熱望に油をそそぐ事件が起こった。

それは私が東大に在学中のことである——文部省主催、東京日日新聞社後援で作曲の募集があり、その第一回と第二回に連続当選したのだから、それまで私の音楽熱にひどく反対していた父も、ついにかぶとをぬいで、勉強の余暇ならば先生について作曲を学んでもよろしいとゆるしてくれた。

そこで私は弘田竜太郎、佐々木基之両先生について正式に勉強をはじめたが、このことは関係がないから略し、その後山田先生の門をたたき、何とかして作曲家になりたいものと相談をもちかけた折の話をしよう。

当時先生は赤坂に住んでおられたが、私は人を介してその時はじめて先生に直接お目にかかった。その折先生は約一時間を費して意見をきかせてくださった。

まず先生の少・青年時代の思い出から、音楽家特に地味な作曲家としての道を歩んでこられたことがいかに茨(いばら)の道であったかを話して下さった。当時は、私も覚えているが、映画の封切の折など、その広告のために楽隊が街をねり歩いたもので、「音楽家」といえば「楽隊屋」と呼ぶ人さえあったほどの時代だから、作曲家としてたつことは生活の面からもひどい冒険であったわけだ。

先生とすれば、先生のそれまで歩んでこられた経験からして、特にすばらしい才があるならともかく、当時の私のような若者を前にして、作曲家になることをすすめる気持ちにはおなりになれなかったのだろう。せっかく大学を出て、もう勤めてもいることだし、あくまで「趣味」として作曲を学んだ方がよいと、懇々と忠告して下さいました。

そればかりか、先生はその時たずさえた私の小曲を全部、さらに一時間をさいて親切におおして下さいました。その時の私だが——先生が今日あるのは、この愛情とこの熱心さだとつくづくそう思ったが、その先生のお人柄が、このたび完成された『山田耕筰全集』の第一巻から第三十巻の終わりに至るまで、美しくかつ情熱に満ちた響きとなって永劫に伝えられてゆくことになると思うと、嬉しさが胸にこみあげるのを禁じ得ない。

(筆者 農学博士東大教授・魚類研究家) 山田耕筰全集 第二巻歌曲2 第一法規出版社より

X 「芥子粒夫人」演奏記録 (日本洋楽百年史より)

- No. 1 大正15年4月27日 7時 日本青年館
日本交響楽祭 第四夜 1章のみ
指揮者 山田 耕筈 独唱 曾我部 静子 (斉藤)
- No. 2 全曲は萩野綾子氏によって発表。
- No. 3 全曲の舞踊化を藤間静枝女史 (先代) 昭和二年に振付発表, 評判になる。
- No. 4 昭和4年秋 日比谷公会堂
独唱 関 種子 伴奏 近藤 柏次郎
(後リサイタル・NHK全国放送……伴奏 木村 潤二氏)
- No. 5 昭和5年10月6日, 7日, 9日 楽壇生活25周年を祝う会 日比谷公会堂
山田耕筈氏祝賀演奏会
第一夜: 司会者 牛山 充 講演「山田耕筈の歌曲について」 外山 国彦
独唱 浅野 千鶴子 伴奏 近藤 柏次郎
“……此の夜出された歌曲の内, 私は「ポストマニ」「曼珠沙華」等を殊に傑作であると考へる。「ポストマニ」は第一編より第四編に亘る長稿で, 童謡風の北原氏の譚詩に, 山田氏はレシタティーヴと歌謡風の旋律とを融合させ, そこに, 実にすっきりとした歌曲の境地を展いている。当夜の歌者については, 先づポストマニを歌った浅野千鶴子嬢を称えたい。その表現も童謡譚詩にふさわしくすっきりしたもので, 如何にも, 此の童話の語り手にふさわしかった。……”
第二夜: 司会者 堀内 敬三 講演「山田耕筈の器楽曲について」 小松 耕輔
第三夜: 司会者 外山 国彦 講演「山田耕筈の舞踊詩について」 牛山 充
独唱 関 種子 伴奏 近藤 柏次郎
高田せい子とその舞踊団 (舞台装置 東郷 青児)
ポストマニ (高田せい子) 魔法使い (宮 操子) 王様 (江口 隆哉)
ちび鼠 (彭城 秀子) 猫 (長尾 和子) 犬 (中村 笑子)
猿 (木村 文子) 猪 (佐藤 春子) 父鼠 (高田すみ子)
母鼠 (立花よし子) 花 (稲葉初枝 他)
“……せい子の「芥子粒夫人」は今年度の収穫だ。舞台装置は東郷青児君。印度風にあられども立体的の新舞台装置はバリあたりの舞踏芸術公演の初夜に身を置く思ひあらしめた。まづせい子のパントマイムの巧みな演技かたと, おなじく宮 操子の彫刻的な風姿の優秀さに敬意を表する。それに関 種子がこの難独唱を巧みに, 唄ひこなしたことによって, このパントマイム一幕の成功をしてゐることを忘れてはならぬ。舞踏音楽背景色彩照明すべてにわたってよくとのへられた「芥子粒夫人」は, 長く残るべき舞踏のひとつであらう。高田せい子が, 忙中この新作を為したことは, 山田君に対しても意義深い舞踏芸術の捧げものでなくてはなんであらう。わたしは, せい子氏のこの挙を深くよろこびとするものである。重ねて言ふ。「芥子粒夫人」は, 光った舞踏マイムである。”
第四夜: 司会者 小松 耕輔 講演「山田耕筈の管弦楽曲について」 堀内 敬三
- No. 6 昭和5年11月3日 日比谷公会堂
独唱と交響楽と舞踏の夕 (主催 法政大学世界経済学部会)
指揮者 菅原 明朗 管弦楽 新交響楽団 (独唱者不明)
- No. 7 昭和12年6月19日 全曲が管弦楽伴奏で行われた。
新交響楽団
指揮 山田耕筈 独唱 辻 輝子
-
- No. 8 戦後 四家 文子
- No. 9 関西 大阪 木村絹子・小島 幸・松本寛子・門屋菊子
京都 藤田ユキ・榎本八重子・須田香代・斉藤言子

XII 北原白秋 作詩による

山田耕筈 作品 歌曲 (アイウエオ順)

歌曲 第一卷

明治37年—大正7年7月

歌曲 第二卷

大正7年8月—大正11年11月

犬のお芝居

六 騎

AIYAN の歌 (五曲)

- 1 NOSKAI
- 2 かきつばた
- 3 AIYAN の歌
- 4 曼珠沙華
- 5 気まぐれ

かやの木山の

歌曲 第三卷

大正10年7月—大正13年9月

さいかち虫

蟹 味噌

紫雲英田

やなぎのわた

ベチカ

待ちぼうけ

鐘が鳴ります

馬 売 り

おろかしく

芥子粒夫人 I

II

III

IV

赤い夕日に

短 夜

城ヶ島の雨

歌曲 第四卷 (童謡百曲集)

大正15年—昭和3年

足 踏 み

すかんぼの咲くころ

ほうい ほうい

夜 中

お 月 夜

からまつ原

たあんき ほうんき

たんぼぼ

お月さま

すずめ追ひ

お米の七つぶ

日 永

竹取りのおきな

郵便くばり

こうまの道ぐさ

あわて床屋

こ の 道

風

JOAK

ちんちん千鳥

さざなみは

雨のあと

雨 の 田

よ り 道

砂 山

わ ら び

ぶどうのつる

こんこん小山の

ゆうべのお客様

すずめのお宿

にわとりじいさん

おらんだ船

歌曲 第五卷

大正13年秋—昭和6年春

かんなくずの笛

こどもの大工

あの子のおうち

新 入 生

豆 の 葉

た か

ころころかわず

かえろかえろと

からたちの花

すずめ追ひ

かなかな

牡 丹

海の向う

あのこえ

多 蘭 泊

筑 波

落 葉

虹とこうま

つらつらつばき

ふれふれ小雪

からりこ

三日月おじさん

うぐいす

雪こんこん

ロシア人形の歌

1 ウエドロ (水涌)

2 ギエーウオチカ (娘さん)

3 ニヤーニユシカ (乳母)

4 カロウヴァ (牛)

5 ロートカ (小舟)

お馬乗り

アンデルセンの晩

アンデルセンの姿画に

からたちの花 II

ねんねのうた

1 こぬか雨

2 げんげ草

感謝の朝夕

朝のいのり

夕べのいのり

おとめの歌

遊ぼうよ

幼年の歌

松島音頭

歌曲 第六卷

昭和6年—昭和20年敗戦迄

さむい夕やけ

月夜の飛行船

百舌鳥の子

山のあなたを

三 月

言 問

曇り日のオホーツク海

上海特急

軍 馬

満洲の春

「新しき土」から

1 青い空見りゃ

もといたお家

馬鈴薯むき

ひょうたん

歌曲 第七卷

昭和20年以後

とらえてみれば

作曲年代順

第一法規出版株式会社

山田耕筈全集より

第一巻—第七巻

編集・発行 (1936年10月)

北原白秋 作詩による 山田耕筰 作品歌曲・団体歌

北原 白秋

AIYAN の歌

1. NOSKAI
2. かきつばた
3. AIYAN の歌
4. 曼珠沙華
5. 気まぐれ

青空のかなたに

赤い夕日に

朝日はのぼる

足踏

遊ぼうよ〔1〕

遊ぼうよ〔2〕

新しき土の歌(青い空みりゃ)

〔「新しき土」主題歌〕

あのこえ

あの子のお家

網干町歌

雨のあと

雨の田

あわて床屋

アンデルセンの姿画に

アンデルセンの晩

犬のお芝居

鶯

うてば響く

馬売り

海の向う

植柳尋常高等小学校校歌

雲鷹丸記念歌

永安小学校校歌

選ぼうよ みんな

お馬乗り

大分県立第一高等女学校校歌

大阪歯科大学専門学校校歌

大谷中学校校歌

岡崎市歌

お米の七粒

尾去沢尋常高等小学校校歌

御誕生 御誕生

落葉

お月さま

お月夜

朧夜の曲

和蘭陀船

おろかしく

解消節

かえろかえろと

輝く朝

輝け朝鮮

かぐや姫

笠間農学校校歌

風

風に見よ

かなかな

鐘が鳴ります

蟹味噌

蒲田尋常高等小学校校歌

かやの木山の

からたちの花

からたちの花Ⅱ

樺太郎歌(補)

からまつ原

からりこ

川崎尋常小学校校歌

感謝の朝夕

関西学院校歌 空の翼

関東軍をねぎらう歌

かなくずの笛

岐阜薬学専門学校校歌

九大医学部歯科口腔外科教室歌

暁星校歌

暁星行進曲

共存共栄の歌(補)

清見潟商業学校校歌

桐生音頭

緊縮の歌

釧路第四尋常高等小学校校歌

熊本医科大学予科校歌

雲の翼

曇り日のオホーツク海

クリスマスが来やすわい(訳)

軍馬

警察行進曲

京城女子師範学校校歌

紫雲英田

建国歌

建国体操讃歌〔「『建国体操』の

音楽』挿入歌

建国体操前奏歌〔「『建国体操』

の音楽』挿入歌

研数専門学校校歌(補)

現代の歌

交通の歌

校風振興歌〔栗田農学校〕

弘法大師讃仰歌

仔馬の道ぐさ

国分女学校校歌

国民の歌

言問

子どもの大工

こぬか雨

この道

駒込中学校校歌

駒沢大学競技応援歌

駒沢大学校歌

ころころ蛙

こんこん小山

さいかち虫

佐賀高等学校水泳部戦捷記念歌(補)

漣は

さむい夕やけ

三月

J O A K

汐入尋常小学校校歌

子女団の歌(補)

下関市歌(補)

馬鈴薯むき

上海西部日本尋常小学校校歌

上海特急

城ヶ島の雨

少女の歌

湘南中学校校歌

昭和の黎明

昭和の日本

地雷爆発

新人生

酸模の咲くころ

雀追い〔1〕

雀追い〔2〕

雀のお宿

砂山

成城高等女学校校歌

清津公立高等女学校校歌

製鉄所運動競技応援歌〔八幡製鉄所〕

製鉄所歌〔八幡製鉄所〕

選挙粛正の歌

全国新聞社勤続三十年表彰歌

前進座座歌

象の子

空の行進曲

空は青雲

たあんき ほうんき

第一師団団歌(補)

大正大学校歌

大日本警察の歌

大陸軍行進曲〔「大陸軍の歌」行進歌〕

大陸日本の歌
大陸の黎明
大連朝日小学校校歌
大連第三中学校校歌
大連中学校校歌
台湾少年行進歌
台湾青年の歌
鷹
高輪商業学校校歌
高輪台尋常小学校校歌
竹取の翁
起て起て青年
多蘭泊
たんばぽ
父母の歌
秩父の宮さま
秩父宮頌歌
ちんちん千鳥
月夜の飛行船
継の宮さま
筑波
つらつらつばき
帝都消防歌〈補〉
鉄道精神の歌
伝習館館歌
天王寺高等女学校校歌
統円歌
東京高等工業学校校歌
東京高等蚕糸学校校歌
東京高等獣医学学校校歌
東京高等商船学校校歌
東京歯科医学専門学校校歌
東京商科大学予科会歌
東京帝国大学運動会歌
東京鉄道病院の歌 椎の木の歌
東京文理科大学 東京高等師範
学校校歌
東京薬学専門学校校歌
同志社大学学歌
堂島小学校校歌
東洋英和女学校校歌
遂げたり神風
豊中学校校歌
豊原第一尋常高等小学校校歌
とらえてみれば
内閣印刷局行進歌
長崎県女子師範学校校歌
中野高等女学校歌
浪の音
業平小学校校歌
南関小学校校歌
虹と仔馬
日本絹撚株式会社歌

日本国民歌〈補〉
日本国民の歌
日本産業の歌
日本女性の歌
日本大学応援歌
日本電気社歌
鶏翁さん
ねんねのうた
1. こぬか雨
2. げんげ草
野田高等女学校校歌
延岡高等女学校校歌
白洋舎の歌
八王寺市歌
初恋
花輪高等女学校校歌
春江南尋常小学校校歌
日永
姫路中学校校歌
ひょうたん
拓けよ満州
平原小学校校歌
福岡県連合青年団団歌
福岡高等学校校歌
福島市歌
福助さん
福助足袋会社社歌
豊山中学校校歌
復興行進曲
葡萄の蔓
吹雪に明けて〈補〉
ふれふれ粉雪
ペイチカ
ほういほうい
邦人一如の歌
放送会館落成祝賀の曲
牡丹
法隆寺
北青公立職業学校校歌
歩三の春
芥子粒夫人
歩兵第三連隊歌
待ちぼうけ
松江町歌
松島音頭
松原商務学校校歌
豆の葉
満州興国の歌
満州石油株式会社歌
満州の春
三日月おじさん
三崎実科高等女学校校歌
三崎尋常高等小学校校歌

短夜
水引の歌
三菱長崎造船所所歌
水戸市歌
身延中学校校歌
宮崎工業学校校歌
むかし噺
室蘭中学校校歌
明治節の歌
明治天皇頌歌
門司中学校校歌
百舌鳥の子
もといたお家
もの
矢留尋常高等小学校応援歌
矢留尋常高等小学校校歌
柳河高等女学校 校風振興の歌
柳河商工会行進歌
柳河盲学校校歌
やなぎのわたの
山のあなたを
山の月夜
郵便くぼり
昨夜のお客さま
雪こんこん
幼年の歌
横須賀市歌
夜中
米子高等女学校校歌
米子商蚕学校校歌
米沢村村歌
寄り道
ライトブリューの歌
陸軍技術本部の歌〈補〉
陸軍被服廠の歌
立正商業学校校歌
裡里農林学校校歌
霊峰富士
ロシア人形の歌
1. ウエドロ(水桶)
2. ジューラチカ(娘)
3. ニヤアニシュカ(お乳母ちゃん)
4. カロウワ(牛)
4. ロートカ(小舟)
六騎
Y校端艇部の歌
我が朝日
和光学園校歌
忘れた花
わらび
山田耕柞作品目録
遠山音楽財団付属図書館
編集・発行(1984年11月1日)



芥子粒夫人 (ポストマニ) I

・山田耕筈氏による解説

①……声 楽

②……ピアノ

Allegretto leggiero ♩ = 138

北原白秋 作詞

・華麗な中にもどこことなく暗い影をひくポストマニの性格を示す主題

f → *p* *f* *p* → *mf*

② 指先のみ鋭く鍵をつまみ上げる様な軽く明るいタッチで。

② 増五度音程は印象強く。

♩ = 100 ♩ = 88 ♩ = 88

・踊りのリズムをもった ちびねずみの愛らしい生活 ・魔法使いの姿 ・魔女の不気味な顔

f *dim. poco* *a poco* *esitando* *mf* *p* *riten. un poco*

② 手首・ひじを柔かくパネにして丸い音で

② ちびねずみの足どりが5度の半音階進行で対照的に表現されている

② 鍵に指と手の甲の重みをのせた不気味な音で

Allegro moderato (♩ = 100)

きれいなー きれーい、 ちびねずーみ、 ー おまえに、

① 歌い始めて間もなくの半音の音程は非常にむずかしい

Allegro moderato (♩ = 100)

p *mf* *p* *mf* *colla voce* *mf*

② ちびねずみが飛びはねる様なリズムの伴奏 前奏と全く調子を変えて

② 右手半音階は走りまわるねずみの描写 指先で軽くアクセントなしに

• 魔法使いの甘い誘惑の声

p *mf* *poco riten.* *a tempo* *p*

おはなし、さして、あー ぎょ、―― まほうー つかーいは、

p *mf* *colla voce* *pp* *a tempo* *p*

⑩ 凄味をおびて

• 柔かにねずみの耳元へささやく
ラシさんのテーマ

mf *p* *mf* *molto riten.* *f* *poco riten.* *mf*

じゅもんを、となえ、 さあ、さあー おたべよ、 こめのつ

⑨ 強いて迫る様に ⑨ 急に声を落として

mf *p* *mf* *molto riten.* *f* *mf* *colla voce*

⑩ メロディーをはっきり出す

pp *legatissimo* *molto riten.* *Poco lento* *Tempo Imo* *mf* *p*

ぶ、―― まほうー つかーいと、

pp *colla voce* *Poco lento* *Tempo Imo* *p*

⑩ ゆるくためらう様に

⑩ 鍵盤を通してハンマーを
持ちあげる様にしてPPを出す

ちーびーねずーみ、 — おはなし、しいーしい、

④ 軽く歌う

くらして た、 ガ ンヂス — が わ の、 つ つ み の、

⑤ ♩ = 1 拍と見たてて静かに歌う

⑥ ♩ = 1 拍と見たてて演奏

う え の、 — し ゃ ろ — ば の、 お こ — や の、 — む し — ろ ご

⑦ C にもっていく

Tempo Imo *accel.* •嬉々として魔女にたわむれるちびねずみ *a tempo* *poco riten.*

や、
Tempo Imo

p libero *f accel.* *a tempo* *pp* *poco riten.*

⑤ ヴァイブラートペダル

rall. *Lento un poco (♩ = 66)* *mf quasi recit.* *riten. molto*

それも、しばらく、ちびーねずーみ、

Lento un poco (♩ = 66) *mf (m.s.)* *colla voce*

⑥ 下の声部の動きを意識して

Più mosso *p* *mf* *p* *riten. molto*

かなしく、なっ たで、ちゅう、ちゅう、ちゅう、

Più mosso *p* *p* *riten. molto* *pp* *accel.* *

•ねずみの生活に倦いた
ちびねずみの焦燥感

Molto meno (♩ = 52) *con tristezza* *p* *mf* *p* *mf* *alteramente* *mf* *f*

かえて、 くだされー ねずみ にゃ、あーいーた」 「なにに、 なりーたい」

Molto meno (♩ = 52) ⑦ 甘える様、ゆるく泣き声を混ぜて歌う ⑧ 莊重味を加えてやや強圧的に

p *mf* *p* *mf* *mf* *sf* *p*

Un poco più mosso *p* riten. *Molto meno ff* alteramente molto *a tempo riten. molto mf*

「なににでも」 「ねこに、してやろ」 にゃんにゃんにゃん

Un poco più mosso *colla voce mf sf p* riten. *Molto meno ff* *a tempo sf p riten. molto*

①魔法使いからすばやくちびねずみの
透明なタッチで。下声部内声のメロディ
出して

②左手の和音の内声の1の指を深く入れ
少々濁る様な音色で

Tempo Imo *mf leggiero f* molto riten. *a tempo*

猫に変わった嬉しさを示す
ねこに、なりま—す—ちび—ね—ず み、
Tempo Imo ねずみの踊り

p mf f p f a tempo

• 猫の歡喜の笑い声も
長く続かぬ

• 束の間の喜びは消える
poco a poco riten.

Più mosso (♩ = 112) mf

「かえ て、

Più mosso (♩ = 112) mf leggiero

p p pp poco a poco riten.

* ③明るく伴奏も軽快に

• 魔法使いに対する猫の媚態

Molto meno *ff*

く だ さ れ、ね こ に も、あ い た 「 な に に、 な り た い 」

Molto meno

p *mf* *ff*

※

① 威嚇する様な口調の中にやや ② 写実をさけて極めて単純に歌う
 狐げた気持ちを加える *minacciosamente* ③と④の入りのタイミング 巧妙に

pp *f* *ff*

「 な に に で も 」 「 い ん に、 し て や ろ 」 わ ん、わ ん、 わ ん、

タイミング

pp *f* *ff* (m.s.)

※ ※ ※ ※

⑤ 犬の跳躍を示した
 もの、急激に強く
 はね上がる

Allegro moderato ♩ = 100

い ん に、 な り ま す、

Allegro moderato ♩ = 100

• 犬になったばかりの猫の狂喜の描写

subito p *f* *ff*

※

⑥ ⑦ 右手の分散和音はかるい音で 左手の内声は深くメロデー大切に

poco accel. *Poco meno*
mf

みけーねーこ が、 「か え て

poco accel. *Poco meno*
ff *p* *ff* *mf*

⑨前に出た犬の
鳴き声の再現

f *ff* *p* *alteramente* *f*

く だ さ れ、 い ん に も、 あ い た」 な に に

⑩ *f*・*ff*は切実さを秘めて

• ちびねずみの胸中に描かれる猿の軽快敏捷な姿

mf *Più mosso* (♩ = 112)

「なりーた い」 「なににで も、」

mf *ff* *mf* *f* *p*

⑪指先で鍵盤を
つく様なタッチで

• それを感知して「猿にしていよう」と心中に期している魔女の心の描写(軽妙なうちにも滑稽味を加えて)

sfz sf sf mf

f mf marcato
「さるに、していよう」 さるに、していよう、
ff mf ff sf p ff

⑨猿の鳴き声の様に

⑩鍵盤を前に突き勘高い音色で

Poca meno p Poca meno
saru ni, narimasu, mukuu-naga,
pp riten. pp soto voce mf

• 軽さの中に猿芝居を思わせる様な道化じみた気持

⑪右手のメロディを歌よりも美しく legato に歌って演奏

p f molto riten. molto riten.

⑫気分を変えて急に落着いて

Più lento *p* *mf* *gravemente* *p*

「かえてください、さるーにも、あい た」 「なにに、なりたい」 「なにに、でも」

① 咏嘆する様にゆっくりと ① ちびねずみの4回目の変身の欲求に
ラシも疲れ衰れみをもって

Più lento *p* *mf* *sf* *sf*

② タッチは重みをのせ鍵盤
の上を手前にひいて少し
沈んだ音で ③ やや疲れた様に
音も重く、にぶく

parlando *e minaccioso* *p* *molto riten.*

「のじしにしてやろ」 ふう、ふう、ふう、

ff *mf* *p* *molto riten.*

④ 極めて誇張して弾く ⑤ 疲れきった様に鍵盤を
指の腹で手前にひくタッチで弾く

(♩ = ♩ Precedente) *mf* *f*

さる が、ー の じー し に、 か わ り ま す、

(♩ = ♩ Precedente) *mf* *f* *ff*

⑥ ソプラノとしては出しにくい音程なので
ピアノのメロディは少し音量をおとして弾く

• 芝居の口上の様に、荒れ狂う野じしの態

poco accel

mf cresc. molto

ff

⑤ *cresc* は両手 1 のゆびを強くしてゆくと切迫してきこえる

• 人を魅了するような青春の妖気が漂う様に

(♩ = 69)

mf

f

p

mf

esitando

f

「か え て、く だ さ れ、う つ く し い ひ と

⑥ 声音もそれまでの玩具的色彩を捨て情味豊かなもの

(♩ = 69)

mf

mf

⑦ A の固定低音の響きの上の半音下行の和音を効果的に *legatissimo* に弾く

• 哀切きわまりない性に生きようとする
女性の痛ましい祈りの声

mf

p

mf

p poco riten.

に、 - ああ、 ああ、 の じ し は、 い や ら し

mf

p

mf

p poco riten.

⑧ 伴奏者も溜息の様なブレスをして

• # の調より b の調に移行しているのに注意して

• たれ幕のうしろに移された陰の声として

rall. poco a poco **Tempo Imo** ♩ = 138

い」

Tempo Imo ♩ = 138

p rall. poco a poco pp *ppp*

una corda

⑩ 話の一段落を示す様に *Tempo* は除々に緩く、タッチは重さから軽さに移行していく

⑪ この章に 1 回しか使われぬ *PPP* の効果を出して舞台裏から聞こえてくる効果を出して

♩ = 100

♩ = 100

mf p mf f p mf pp *esitando*

senza sordino

Più lento ♩ = 88 *Allegro moderato* ♩ = 100

p

そこで、

Più lento ♩ = 88 *Allegro moderato* ♩ = 100

mf p riten un poco p

⑫ 冒頭の *Thema* と異り、
2 拍目のバスに V はない

・魔杖のひと振りで美しい娘ポストマニに化身するちびねずみ

ひとふり、まほうーづーえ、ー みれーば、ー

mf *p* *mf* *colla voce* *mf*

※ ① ②

①音型は前回と同じであるが、ペダルが書き込まれているのに注意
どこまでも夢想的に

①と②の二重唱の様に

きれーいな、むすーめの こ、 まっかな、ねりぎぬ、

p *mf* *p*

① ②

①歌の様に *legato* で

歌舞伎的に誇張して表現
音も厚みをつけて

ふさふさ、くろかみ、きんーの、ーうでわや、 かみかざ

p *molto* *riten.* *poco* *riten.* *p* *pp*

p *molto* *riten.* *mp* *p* *colla voce*

① ②

(ossia)

お や - し き ず ま い、 し ゅ ろ の は、 お こ - や - は、

mf *molto riten.*

mf *molto riten.*

Es dur

⑨にきれいな小娘のモチーフが
出てくる

• ちびねずみの歓喜のひと動き
accel.

Più lento *mf* *Vivissimo*

ふ り す て - - る。

Più lento ⑩大芝居に結ぶ *Vivissimo*

pp accel. *f* *ff*

⑨効果的な・

⑪風が吹き去る様に華やかに奏き終る

mf *p* *mf* *ff* *fff*

⑫息と間のとり方微妙に

⑬I章の中で一回
表れる *fff*

II

• 玩具の馬のギャロップ

Allegretto scherzando ♩ = 92

⑤ 何らの誇張なしに極めて自然に伴奏の流れに
のって「王さま」は出てくる

mf - p mf - p

王 - さ ま、お う ま で、

pp *cres.* *cen.* *do* *f*

senza Ped.

⑥ PP から漸次強めてあたかも映画の映像が徐々にクローズアップ
される様 ディナーミクのコントロールをして演奏する
馬の首につけた鈴の音色を出して

と お ら れ る、 -

cres. *cen.* *do* *al* *ffsf* *f* *p*

⑥ 八分休符に注意

• 王様の馬が今や明らかに登場

王様を乗せた馬の静かな足踏み

mf *pp* *riten. un poco*

senza Ped.

⑦ 手の握力を使い指先で鍵盤をつまみあげる様なタッチで

- 王様のお越しを目にしたポストマニが美しいしなを作りながら、手に持った花に水をかけている姿

⑨ 少し *Tempo* を落して

- 花にそそがれる水の描写

- 一時止まった王様の前進であり美しいポストマニの媚態

⑩ 水が光り虹色に宝石の様にきらめくのを *ff* で表現しているので重くなく

⑪ ♪ の技巧を巧妙に使って雰囲気盛りあげてゆく

⑫ ポストマニのメロディなまめかしい音色で

- (Tempoを極度に落として) スカートの裾を広げ姫態の限りをつくした札をしている小娘

leggiere ed amabile *pp* *Un poco più lento* *mf*

「あかい、くだもの、さしあげ—まする、へい か、おはいり、

pp *leggiere ed amabile* *p* *pp* *Un poco più lento* *mf* *p*

- 王様は美しい馬上に座して、ポストマニを凝視している。馬はたてがみをふるって誇らしげに佇立している。美しい一幅の画面

p *esitando* *Tempo Imo* *riten. molto*

なさいませ」

Tempo Imo *colla voce* *p* *pp* *poco riten.* *p* *poco riten.* *mf* *ff* *riten. molto*

⑩ たっぷりと間をとる

- 馬上からポストマニを見おろす王様

Largo $\text{♩} = 66$ *f* *molto espressivo* *leggatissimo* *p*

「お お、 う つくし — い、 — ありがと—う」

Largo $\text{♩} = 66$ *f* *p* *(m.d.)* *(m.s.)* *p*

- ⑨ 王様の貫録を表わす豊かな音色で長いアルペジオを使っている

- ⑨ Bassに増五度音程の出た時歌は心をこめて表情豊かに

Tempo Imo • 下馬されようとする王様と馬の動き

pp *esit. un poco* *mf poco a poco riten.*

王 - さ ま、 う ま - か ら、 お お り に、 な る、

Tempo Imo

pp *m.s.* *esit. un poco* *p* *riten. molto* *ppp*

⑨ 王様の動作
応揚に

• 王様は馬からおりて可憐な
小娘の前に立っている *poco meno* *mf* • しかしその小娘に解し得ぬあるものを感じて
曲はmollになる

「あ か い、 く だ も の、 ま だ、 た べ ぬ、

pp *mf* *poco meno*

• 小娘ここぞとばかり ⑤ 心の描写を
勢いこめて身の上を PPで表現
語ろうとするが *ritenuto* *poco - molto* *p* *Molto mosso* *cres.*

お ま え の、 お や た ち、 き い て か ら」 わ た し の

ritenuto *poco* *pp* *colla voce* *esitando* *pp* *cres.*

cen - do *f* *esit. pp* *Meno mosso* *p*

お や た ち、 ち び ね ず - み、 と は、 い い に く い、 -

⑤ 一気に言い放つ様、極めて早口に ⑥ 急に首をすくめて

cen - do *f* *p* *pp* *colla voce* *p*

• 王様と小娘の心の描写

Tempo Imo

は ず か し い、

① 極度に媚態をみせてなまめかしく

pp

Tempo Imo

f

p accel.

riten.

② 華麗な娘になったちびねずみのモチーフ

più lento

f

p

mf

「き っ と、 女 王 ー に、 な る ひ と と、 ま ほ う

più lento

mf

colla voce

p

mp

mf

③ 華麗さを出すために長いアルペジオを使っている

④ メロディーをたっぷりうたって

f

p

riten. molto

a tempo

• 王様の一步前進

riten.

つ か い が、 も う ー し ま す、

f

p

riten. molto

a tempo

mf

riten.

Più lento

mf

• 威厳を持ち小娘を見つめる王様

poco riten.

a tempo

「お ま え の、 な ま え は」 「は い、 へ い か、

Più lento

p

colla voce

f

⑤ ポストマニはねずみの本性を隠そうと勿体ぶるが、伴奏にはねずみの動きを流している

• それでも なおかつ残る心中の不安と王様の
納得をたしかめ極めて素直に答えるポストマニ

ポ ス ト マ ニ ー と、 も う し ま す

⑮誇張して見得を切る様な音で

⑯⑰極めて品よく

Des dur

Tempo Imo

「よ し、よ し、お ま へ と、 結 婚 し ま し ょ」 ま ぼ う

⑱芝居気たっぷりに

⑲Des durからE durに転じて王様の安堵の内に決心した心境を表現している

⑳歌舞伎のチョンと入る柝の音の様に
入るタイミングを巧みに

mf molto riten. Tempo Imo

つ か い も、 こ り ゃ、め で と う、

㉑はつきり切る ㉒派手に歌い結ぶ

㉓1の指

㉔2

㉕相当誇張して表現
右手の指を始めは2で途中から1で
弾くと＜が出やすくなる

III

Largo gravemente ♩ = 52 • 莊重・華麗な中にもどこか来るべき悲劇を暗示する哀愁味が漂う主題

• 女王様になったねずみのモチーフ • アルベジオは華麗さを表現

⑨繰り返されるThemaなので一回目は割合にさらりと弾く。#の変化音で悲しみを秘めている

⑩華麗な音色で
⑪原譜・オーケストラ総譜ではCisが正しい

いまは、ごてんで、女王さま、— それでも、

⑫左手の休止符の入った6連音符とaccelの伴奏でポストマニの不安な心表現

• 不安に怯える様 • それでもなおおそいかる不安の情

お ず お ず ポ ス ト マ ニ、

⑬Ⅱ章の小娘のThemaが突然減7の和音で現われる

Più mosso *p* *sotto voce* *poco accel.* *esitando* *a tempo* *p* *pp*

「いまに、しれたら、どうなる でしょか、 わ たし、う そ つ き、

Più mosso ⑤声をひそめて早口に ⑤憐れな自分を嘆く様に

fz *pp* *poco accel.* *riten.* *a tempo* *p* *pp*

⑤⑥ *pp* は内心の動きを表現

mf *riten.* *a tempo* *Andante graziosamente* ♩ = 66 *p*

す ぐ し れ よ、」 あ る ひ、

mf *riten.* *mf a tempo* *Andante graziosamente* ♩ = 66 *p* *quieto molto*

⑥ポストマニの揺れ動く心理
♭の調の心配から、♯の調に移行
簡単に陽気になるチビネズミ

esitando

こ か げ に、 こ し かー け て、 お か し、 た べ たー べー

colla voce

⑥やわらかい穏やかなびびきを保ってゆるやかなシンコペーションが続いてゆく

• 美しく装ったポストマニが静かな王宮の庭園の池のほとりにて、自分の美しさに見とれている

• 彼女は食べることを忘れていない。ふと御菓子の一かけが池におちた。すると池の中の魚は身を躍らせてそれを奪いあう

riten. un poco *Più mosso* ♩ = 126

みとれて た、

riten. un poco *Più mosso* ♩ = 126

p *tr*

ⓅCisをはっきり Tempo giusto

• 水は波立ち静かな水面にはにわかに笑いさざめきが聞える

• 水面のさざめきにかえて誇りを感じて自らの美を讃える
ポストマニの心中の歓喜

leggiere *mf*

ま っ かな、ね り ざ め、ふ さ ふ さ、くーろーか み、

tr *mf* *f* *mf*

Ⓟ1拍 sp

p *mf* *esit.* *molto riten.* *Meno mosso* ♩ = 108 *pp*

おいーけ に、う つ ー た、み ずーか が み、 す ず しい

p *mf* *colla voce* *molto riten.* *Meno mosso* ♩ = 108 *pp sotto voce*

ⓅⅠ章のちびねずみの楽しい生活のリズム、極めてしっとり、美しく

ぎんいろ、きぬウェール、ももいろ、むらさき

p *esitando*

⑧右手内声の半音の下行形に注意
1章と共通の動きを出している

⑨冒頭のネズミのリズムの変奏

たまーかざり、つくづく、みとれて、

p *riten.* *a tempo* *poco a poco* *riten.* *p*

⑩水の波紋、それに映るポストマニの姿も揺れている

「まあ、まあ、ごらん、なんと、きれいな、

f *con larghezza* *Allegro vivace* ♩ = 138 *ff*

⑪大袈裟に歌う

f *colla voce* *ffz* *mf* *Allegro vivace* ♩ = 138

⑫アルペジオの形の相異に注意 ⑬柝の音

allargando *ff* affrettando *a tempo*

女 王 — — — ま、

⑤ うんと応揚に

ffz *colla voce* *ff* *f a tempo*

⑥ ピアノはよく歌と合わせて

• 俄然何物かを発見、急激な驚きに身のおきどころをしらない

pp *ff*

⑦ 減七の和音と共に親ねずみの登場、ヴィブラートペダルで

riten. *Allegretto quasi Andante* ♩ = 100 *p*

そ こ は、ち ゃ う ろ う ち ゃ う ろ、

pp *ppp* *riten.* *Allegretto quasi Andante* ♩ = 100 *p*

⑧ この章唯一の PPP で嵐の前の
不気味な静けさの様な効果

ten.

ち ひ ね ナー、 ま、

ten.

お さーじ め、 ひーと かーけ、

tr colla *tr voce* *f* *tr*

ten. *

⑦歌曲としての気品を損なわぬ程度に嫌悪の情を
声色に出して

いたーだーこ か、 「しっしっ、あーっ け、

⑧ポストマニの内心の焦燥

⑨娘ねずみに追われてあきれる
母ねずみの動き

いやらしいねずみ あしで、と、ける、ボ スト マ

⑩パートの反進行の形は、
母と娘の心の隔りは大きくなり
悲劇的葛藤に入ること示す

ニ、⑦歌舞伎でいう“見栄を切る” する と、ね ず み と、

⑪ポストマニの一蹴に驚いて逃げ去る母ねずみの動き

⑫邦楽の太鼓の音で

⑬のPPと⑭・Pのバランスに注意

ちゅう、ちゅうハ ちゅう、 「お ま え、わ た し を、 し ら な い の」

⑬大げさな—を使って、—の後ろの音は消して

Meno mosso

「いえ、いえ、しやーせぬ、なんの、しろ」

⑤ポストマニは細く哀訴する様に、しかしすぐ威厳を加えて

Meno mosso

・ポストマニは自分の幸福をくつがえそうとする母ねずみがうらめしくてならない。ポストマニの焦燥

accel. *riten.* *a tempo*

い や な、か お し て、

a tempo ⑥語り手は舞台中に響き渡る様に歌う

⑦小娘のモチーフの一部分

riten. molto *Allegretto inquieto* ♩ = 108

女王ーさま、 「おまえは、かあさーん、おわすれ か、ー

Allegretto inquieto ♩ = 108

⑧⑨の二重奏

・ポストマニはどうしていいのかわからない。いたずらに右往左往する

Più lento *ff.* *poco riten.* *a tempo*

ほ ら、ほ ら、 お と うー さ ん も、 き てー い る よ、

Più lento ⑩更に情をこめて

colla voce *ff.* *a tempo*

⑩左手できめて

quasi recit.
pp

またも、ねずみが

②鍵盤の中でひく

Un poco buffonescamente con abbandono
ff

ちろ、ちろ、で て き て、 「お お、お お、

⑤⑥の呼吸を
びったりあわせて切る

• 美しくなった娘を見て啞然として立留る
喜劇役者よろしく瓢けた身振りで

riten.
fff

出 世 ちゃ、こ れ、む す め、 — —

p energico e riten. cresc. molto al fff

⑨歌の「め」を受けて全く歌舞伎的技法、柝を鳴り響かせる
様な音で、一音一音ペダルが欲しい

Allegro molto ♩ = 138 • 娘に対する父母ねずみの総攻撃

「わたしの、むこさま、王ーさまだ」 「おれも、あいたい、王ーさまに」

Allegro molto ♩ = 138

f

②広い音域を意識して

③歌い手の声が小さい時は後打ちのみ*f*にする

Più largamente

「む こーだ、ー しゅうと ーだ、 およろこびな ーさろ」

Più largamente

ff

④ Bassのひびき大切

• ポストマニの顔色は変った
力なく坐り込んでしまう

• それでも親達は自分たちの
身分を悟らない

poco riten. *Più lento* *mf*

「お ま え、あ わ せ にゃ、 わ し ら、り」

Più lento *ff* *poco riten.* *mf* *p*

Meno mosso

⑤Tempoを ゆるくして泣く様に

Più mosso

⑨の入りのタイミング巧妙に

a tempo

95

sconcertate *con disperazione* • ついに目を回したポストマニは池の中に落ちこんでしまう

mf *mf*

ふらふら、めまわし、 いけのなか、

accel. • 親ねずみたちはこれを見て驚き
二匹とも力なく倒れてしまう

f

ねずみのふたおや、「こりゃどうじゃ」

accel. *L.H.* *R.H.* *ff* *ff*

p *L.H.* *L.H.* *R.H.* *ff*

⑨ 水底から湧きあがる泡

・力なく親ねずみ達も倒れるが親ねずみ達にとっても一大事である。そのままにしていられない

・全く違った場所への移行を転調で表現

・作曲者は極めて簡潔な手法でこのお伽噺を先に進める

riten. poco a poco - molto *lung'h' mo* *leggiere* ♩ = 108
a tempo

「ちゅうちゅうどーしよ」 「なぜしんだ」 わけも、わからず

lung'h' mo *leggiere* ♩ = 108
a tempo *p*

mf rit. poco a poco - molto

①一音一音歌と合わせて * たっぷりと

②Bassに増五度音程の出た時、歌は心をこめて、表情豊かに

p *f* *riten.* *lento*
とん でいった、かけた、 なきなき、ラシさん、 よびにい

fp *ffp* *riten.* *mf* *lento*

poco a poco rit.
った、

ff *fp* *poco a poco rit.* *ppp*

♩ * ♩ * ♩ *

父母ネズミの動転をff・fpで哀しみを半音下行進行で表す

③伴奏者は休止符の中に哀しみを秘めて深い溜息のようなオクターブ

・哀しみの沈黙

・ガンジス河のほとりのラシの家(ちびねずみのThemaが一度だけTempoを変えて現れる)
Andantino misterioso poco riten.

Andantino misterioso

mf p mf poco riten. p

⑨最初のThemaにつけられたsfはない
またディナミックが変る

ポストマニの主題はmollで奏き出される。死を弔う挽歌。
暗く悲しく、しかし華麗なポストマニの姿をその悲愁の中に埋もらせてはいけない
Largo gravemente con tristezza

Largo gravemente con tristezza
Come primo

mf p mf p f ff

⑩一応の派手さは失わない様に演奏、アルペジオが冒頭より少くなっている

・やがてラシは王宮にあらわれて
王様の前に伺候する

p p pp

まほうつかいの、ラシがくりや、

• ポストマニの前身を率直に語る

p *mf* *riten.* *a tempo* *ff* *f*

王ーさま、なきなき、 ござりしやる、 「へい か、ま ず ま ず、

a tempo ⑤ 浄瑠璃調で

ff *p* *mf*

ま こ と を、 い え ば ホ ス ト マ ニ こ そ、

⑦ 新しい形の譚詩曲のがくぶちからはみ出さぬ様に落ち着いて悲しく語る

ff *p* *mf*

⑧ 和音の下を響かせて暗く

poco riten. *pp* *pp* *subito* *p*

ちびねずーみ、 「おな くな ら れ た、 ポ ス ト マ ニ、

poco riten. *pp* *subito* *p* *mf*

(m. d.) (m. s.) (m. d.) (m. s.)

⑨ 左手の響きを重くして深い哀しみを表現する

- 最初のポストマニの主題。
生ける日のポストマニをまぶたの内に描く王様の胸中

Come Imo

あきらめ、あそばせ しかたない、

Come Imo

- ⑩ この曲中一番美しいアリア
オーケストラのひびきの様に

• ラシの慰めの言葉

mf

なにか、

• 王様はあきらめ切れない

いいこと、ござりましょ、ござろ、

- ⑪ Pのメロデーはラシの言葉とは対照的に
流れてゆく

- ⑫ アルペジオによって飾られた旋律は
泣き濡れる若い美しい王様の姿

• ラシはひざまづき王様に誓言する

い ま に、

mf *p* *mf* (m.s.) *p*

① *molto espressivo*
王様はあきらめ切れない

• 王様のポストマニを思慕する熱情の発露
であり、その純情に基く観衆の心

しあわせ、うめあわ せ。]

p *molto riten.* *a tempo* *riten.* *a tempo* *ff* *affrettando molto* *3* *6*

molto riten. (m.s.)

② 深い *fp*

③ オーケストラの豊かな弦の響に
ハープのアルペジオをそえて

mf (m.s.) *p* *a tempo* *rall.* *riten.*

• 可憐な物語が悲愁のたそがれにその影像を溶暗する様に静かにその幕をひく

queto a tempo *p* *molto* *pp* *rall.* *ppp*

④ 拍手が入ると曲の感動が
切れてしまうので伴奏者
は右手を残したままで譜
めくりをする

IV

Allegretto leggiero ♩ = 138

① *ff* 印象つよく テーマは激しいディナーミークをもって現れる

• 一切の悲劇は魔杖によってかもし出されたのである
ラシは、白い歯をむき出して快心の笑を楽しむ

• 場面は又、変る
ラシは王様の誓いを
果そうと……

• 魔杖はふられた

② 増五度音程の
ひびき大切に

③ *in tempo* 軽く単純に弦のピチカートの様に

④ 指のハラで 音色かえて

mf *poco riten.* *Poco lento* *p*

たまげーる、ばかりに、さ いーた は、 さ い た は、 け しーのーは

mf *p* *6* *6* *6* *f* *colla* *voce*

⑩よく⑨にあわせて

Tempo Imo • 花の開く音、そしてそれをみて笑い誇るラシの顔 *poco rit.*

な、

ff *(m.s.)* *f* *tr* *sf* *pp* *poco rit.*

⑩指の腹で軽くつまみ上げるタッチで

Poco meno *mf* *lung'h' mo*

ポ ス ト マ ニーこ そ、 女 王ーさ ま、 女 王ー

p *colla voce* *mf* *p* *colla voce*

⑩軽いアクセントを入れて

esitando *mf* *Più lento* *p* • Ⅲ章のポストマニの美を讃える音楽にかえる

さーまーこそ、 け し のーはー な、ー あ かーのーね り ぎ め、

Più lento *mf* *esitando* *p* *legatissimo*

f *p* *poco riten.*

きぎぬの、ヴェール、ももいろ、むらさき、しんじゅーい

⑨ たっぷりと

f *poco riten.*

⑩ 歌に合わせて

poco lento

ろ、

poco lento

pp

esitando

• ちびねずみの運動の一りん

Lento *ritard.* *Tempo Imo* *p* *mf*

とても、ふしぎな、けしのは

Lento *Tempo Imo*

pp *ritard.* *ppp* *pppp* *p* *mf*

⑨ けしの花の神秘を表現 ⑩ IV章唯一のPPP, PPPP

神秘的な世界を柔かく魅力ある音で
作曲者は全曲中で初めてPPPPを使っている

⑪ ピアノと歌のデュオの様に

f *mf* *riten.*

な、だれも、はじめて、けしーのはな、-----

f *mf* *colla voce*

⑫ 小娘のモチーフがちらりとする

Tempo Imo
ben ritmico

mf *p* *molto*

これが、せかいの、けしの、せんぞよ、インドの、

Tempo Imo

mf *p* *molto*

⑨よくあわせて

⑨Bassのひびきを大切に、冒頭の前形が音域拡大して表れる

⑩ここまで息もつかずに一気に歌い切る
充分誇張して、ゆるく大きく歌う

riten. *f* *Vivissimo* *ff*

おはなし、ポストマニ、

Vivissimo

⑪悠然と「ポストマニ」と
芝居気たっぷりに歌を結ぶ

riten. *f* *ff* *sf* *mf*

- As dur (b) からD dur (＃) に思いがけなく転じ
幅広くかけ上るや As durで解決
- 不思議なお伽噺の終結も不思議な調の組合せで終る

ff *f* *fff*

⑨Ⅵ章に1回表われるfff

土肥みゆきによる芥子粒夫人演奏記録

私は、長年山田耕筰氏の作品を演奏してきましたが、特にこの曲は、多くの方と共演し教えられ、ささやかな自分の考えを持つことが出来ましたので、ここに演奏記録を掲載します。

演奏

- 1957年11月1日 N J B リサイタル 於 毎日大阪会館 主催 新日本放送 歌 藤田ユキ
1969年6月15日 藤田ユキ独唱会 於 京都会館第二ホール 歌 藤田ユキ
1975年11月1日 須田香代・尾原由美子ジョイントリサイタル 於 大谷ホール 歌 須田香代
1985年5月23日 土肥みゆき伴奏リサイタル 於 京都府立文化芸術会館 歌 榎本八重子

公開講座

山田耕筰生誕100年によせて

—譚詩歌曲「芥子粒夫人(ポストマニ)」よりその世界を見る—

- 1985年10月23日 神戸女学院音楽学部専門部会研究発表会 於 音楽館ホール 歌 斉藤言子
1985年11月28日 土肥みゆき音楽講座 於 京都十字屋ピアノサロン 主催 十字屋
歌 榎本八重子

参考・引用文献

- | | |
|---------------------------------|-------------------|
| ・山田耕筰作品資料目録 | 編集・発行 遠山音楽財団附属図書館 |
| ・山田耕筰全集 山田耕筰著 第一巻～第十三巻 | 第一法規出版株式会社 |
| ・この道 山田耕筰伝記 財団法人 日本楽劇協会編 | 恵雅堂出版 |
| ・自伝—若き日の狂死曲 はるかなり青春のしらべ 山田耕筰著 | かのう書房 |
| ・音楽芸術2 特集 山田耕筰生誕100年 | 音楽之友社 |
| ・歌をなくした日本人 小島美子著 | 音楽之友社 |
| ・日本音楽の歴史 吉川英史著 | 創元社 |
| ・日本洋楽百年史 井上武士監修 秋山龍英編著 | 第一法規出版株式会社 |
| ・日本音楽の再発見 団伊玖磨 小泉文夫著 | 講談社現代新書 他 |
| ・日本の音楽を考える 小島美子著 | 音楽之友社 |
| ・日本文化と世界 梅棹忠夫・多田道太郎編 | 講談社現代新書 |
| ・白秋詩集 北原白秋著 | 角川文庫 |
| ・生誕百年記念 近代日本の詩聖 北原白秋 | 財団法人 北原白秋生家保存会 |
| ・白秋逍空 宮 格二 | 河出書房新社 |
| ・北原白秋 歌とところ(上巻・下巻) 木俣 修編 | 旺文社文庫 |
| ・ロシア・ソヴィエト音楽史 ジェームス・バクスト著 森田 稔訳 | 音楽之友社 |
| ・大阪・神戸のモダニズム 1920～1940年展図録 | 兵庫県立近代美術館 |

「芥子粒夫人」
ポ ス ト マ ニ

山田耕筰 作曲・北原白秋 作詞
山田耕筰全集3 歌曲3より
日本音楽著作権協会(出)許諾第8670476-601号

原稿受理 1986年4月7日